七部婆心錄

壙野

三

へ 5
1261
3

七部渡心録

○曠野集員外

あるのゝ文保元年の秋より二条の為冬卿の撰ぶ所及
び此時の程とより神祇官等徒の歌詠及
古人のを左も加へもて曠野集と号かゝを
集とし併ら員外(カズ)の外とより為冬卿撰ぶ所
歌人号東武より西路六三吟一巡路二云路
一巡徒々おの冬日より夫より年月
各よく分体を尽られ撰集あれども義の多
を放て老々に成て更に人よりて携労
あり志まこまかにて老年の路に詳おさまり
義ちを員外ともれし者る故も古集を足
も先るるを宗とすきを考より徒に人捨て
を去よりも又あの筆とりをとるにおゝ
うきるあれい白毎くの所作能く口付
入る所きるまるむ

曲斎文庫

誰為を見をさてむ社ら市中よ
みそ郭のりきを見む我東西明の
林に有て其の社を去れを人と寄
大 東国の八東鹿山と日枝を原とよまれる
よりて佐川田幸六乃ものの山
郭かくとつる勇を実に鉄す
玉 永井の居佐川田昌俊山博菊の屋栖書
山もさく社の郭かくんとうる冬の白雪
又麦を人と思ふとおるか比白
屋俗の世界子の化ともせ君の
侍くを号第に字さらり比
田地く居を移て実は白を感さて
玉 ある人ゝ郭のすさみ傷りしあくてそ人を
高ゝうるの高を知さるらく
芳郭多みる人の中に㋐庫乃
お詩セに庫に居れ㊐人みて

独を乗ゝ杖るよ侍の高ふ
屋ゝさうすさのそ
㋐ハ再杖の居字上ゝるハ下くるハ
トみくゝ拾ゝて辞復す
成 小学致知程子曰嘗見有於庫傷人
者衆莫不同页間一人神色独異向
丈所以乃嘗傷人人孰不知然同之
有曜有不曜者知之有真有不真也
稼を少て実に成る三声の涙と之
ろも実の字を杜のんみるをや
太郎 杜甫七絶触猿実下三声涙
杜丁の句を美て
麦を云れ花に郭まれる㊐四 まを
比又人のをつうて居をを
三人ひき美居吟て
▲三八文通句に掛さと郭芳く芳昌俊の勇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 麥をうさ〜又る事の陽矣　聖氷

▲ある人ひと麥を売又豆のむしもおれす陽る件

ト又丑又売る拵をかくう〈陽をハ麥をのおの所

麥をうさ寺ハ金陽おれい云所ハ云下之さ麥を

□陰よりも陽ハ之の陽をトセハ冬のむ林の麥の塚

も下の麥を拵る拵ハ所れ且才三のもとろにもお

合ろ〜られと拵の説拵ハ所ハ也ひ方ろ〜

□ 切ぐきの陽も考ろ麥の米て　為ろ

▲ある日麥をかさ〜又る陽考ろ冬を上る件ト

又丑麥の日拵を作ろ橋の陽も考ろ麥の米

て上人麥ろく麥陽陽〜麥の陽を作る加矣の陽を

も考ろ上を出て陽考ろ拵ハ因ハ後に寺

ろろ上寺陽て作拵上疫多く付苗麥の拵

上陽ある方ハ陽の矣ハ〇麥ろて陽ろ

● お都みるおこ〜米麥　茂人

▲ある麥ろ陽往来の拵ト又麥辻麥お寺ろ

△粗粉ハ橋ニも考ろニも孫ろ〜今件又麥和と

又る拵陽ハ麥の米て寺麥ハと又麥

□麥陽を考る陽ハ府の敏ハ麥陽き陽麥の陽

ろ寺ハの方義上出米る拵あむ

□ 門の乙月寺人閑のやす〜人は　人

▲ある日お都寺おも寺陽ろ〜ん〜る件ト又麥

陽麥寺人拵を作ろ門の乙月寺人閑の休ひ寺ハ門

おの乙上勝を上陽をて陽ある拵陽麥あ〜と行ある

ひ〜ひ寺ハ男陽病麥ハ〜と見やる拵〜

■ 風の目利を初秋乃雪　兮

▲ある人の云ふ陸奥の秋ひゝ吹仲と是を時雨の時を分てり風の目利をなれ初秋の雪と空おぼして三月十日を分てり俳諧師なれりと雪りて仕手抜に云をトスルを含てり

□ 武士の詩うゝ山も行をゝ　人

▲ある金市ゝ風掃抜を郭を雪解る仲と是を文姉の用を分てり武士の詩うゝ山も行年トハかく風荒てゝ乃ふい風うゝむと網元まる武士の中をゝて奪ゝ詩うゝ山くのある抜ゝ詩ハ陸奥を号る所ゝ風荒る日巣籠て生ず七八月計雑詩巣籠て武翔自食を雪て魚沮乃言葉を汚る又乃ゝ網生ゝ死者を煙うて るを網を詩ゝ詩を御ゝ者御ゝ

□ 志をうよつゝて陸のあるうる　水

▲ある武士の号抜翔とうゝ名の詩うゝ山を良る仲と是を「たの」見を分てり志をうよつゝて陸のあるうるハアり陸のあるのすゝ名ゝ抜年とを陸ゝ仕手抜ゝ〈ある句ゝ字陸ゝる所ゝ詩ハ打ゝ句おくも抜後の抜を分てり国詩手山漢抜片

□ 佛ゝ徑元生寺苔の上　兮

▲ある句字陸ゝうて生ゝる書ゝ美姉の陸ゝ元生遥翔の抜を分てり俳ゝ徑元生寺竹の上ハ翔抜也の人ゝ抜の苔村ゝ徑元を志めて人抜抜ゝ山を抜上三衣佛の抜ゝ

□ ぢぐとうゝ（ヌラシ）めて己（国）もゝ雨　人

▲ある イタヒハセヌカト 佛ゝ徑生寺苔の上ハ人と是ゝ文難を分てり陸ゝ抜ゝ抜ゝ村雨ハヤレく木張もあき抜年ゝ雨ゝ大年の抜陸ゝ雪ゝ雨ゝ出ゝ苔村ゝ雨ゝ雪ゝ年を抜ゝ〇ぢぐハ陸ゝ仲ゝ雨ハ雨ハ陸

方ト双方ニ分ルハ既ニ立テ自然ト保ツ事ナレバ
ヲ以テ一ト改ム

□ 立阿ノ松ハ生キル乃ノ陽　水

◆茶自作ノ席ノ名ニ日著ノ件ト云ヒ阿ノ用ヲ
付ケ立阿松ハ生キル乃ノ陽ハ代茶ニ用ヒ
面ヲ向ノ人雅ヲ入テ立阿松ハ行ノ趣

□ 千自いとゑむ山乃ち　兮

◆茶自立阿松ハ生キル乃ノ陽　笑ハぬ人ト云ヒ雅
人ヲ付ケ千自笑ム山ノ ちヘヲトハ　初日三
自自中日巳自後日三自あれハ　茶ハ日ノ小
山伯ヲ三ヨ人ノ提灯持ル　面倒ト云ク
出ル云ヒ三ノ栗ハ茶ハ乃陽ノ家ノ松
ヲ立阿ハ求ル三ヲ来松ノ事ヲ考テ功名ハ
ヲ立阿ハ求ル三ヲ来松ノ事ヲ考テ功名ハ
ニ立ハ知ハ人ニ知ラレ立文院ノ
松ハ知ヲ笑ヒ人西〈天正ハ乃ハ松ハ巳
茶提灯ト竹ヲ付テ用ヒ図安ヲ集ル

因天正巳中大系千自侵ニ細川玄旨法ヲ学
ヒ伝所紹巴懐紙ヲ授ル者ハ什和ト成ル

□ 焼梅一至梅も　咲ぬり　人

◆茶自今千自笑ム中ノ件ト金ヒ立阿ノ無
ヲ付ケ焼梅一至梅ハ咲ぬ人ノ内ニ又
ハ又山ハ也ハ隠れ比比ハ咲ぬ人ト称
する松ハ因山ノ焼ノ梅ハ咲ぬ人ノ
ヲ花ノ事ハ一ト

□ あてる中も　ゆき名月　水

◆茶自焼梅一至梅ハ咲ぬ人ト称ス弥花樓ハ
立阿ヲ云ヒ雅ヲ付ケ又
おれハ夫ヲ引出ス山ヲ名月ヲ
又ハ雪ヲ一僕ハ知ラ　雪ハ
咲ぬ自ヲ見ル　ヒ名月ハ
□ 雪の月い原の松ハ　兮

◆茶自往来ハ九秋ノ二ノ月ハ

前よ之遣せ君の歌をかくり客の名ハ法の旅なる
おなしハ柳の陰ふ情を寒て客の気を和らく
名の通ゑしきふ名ヲイて云本玄の乾も果
ぬおなすゝ旅ゝと哀く

■ 秋を無庵風く渡人乃宿あ　人

本句別ぬ旅の客の今衣涙の袴のおなしに渡る
名ヲ見遣及出歎をかくり　秋をなやく渡人乃
宿ょ馨帳和闺に信り　妹の恋しき絨に留れ
て旅ゆきも去りぬ更山の岸に跨るも我山内
らむ旅も去らぬハさしてた拂き秋をいき
ん歩く法らす旅之△旅ハ俗の用なるく
の人之〇因所天詩大体四時心總苦於中
断腸是秋天の人或一旅之

□ 明るやら西も东も滝の声　水

本句秋を旅情なまの空も海のま支を乱き
なく侍ト見遣结明しの旅をかくり明るや西も
东も滝の声トハ夜に分くりて海原をはるかや
聞て捕られハ寺やとに方の滝に乱を昔ち
て东もの去明るハ要路契陰ま中なるむ

■ 宿る箱くる利根の川舟　兮

本句明るやら皆旅も寺屋あて滝き侍ト見
遣字今舟の旅をかくり宿る国くるとの乃
川舟ハ旅庵園の如き旅も明の滝に目見て
侍に川風の寒さを覚え各旅なる旅之△ト手川
ハ上野利根郡より下総の鉋子へ出るを大ト手
舟旅く出るを小ト手はともに出庵之

〇 冬の日乃てらしとてかき乱き　人

本句宿る所なる旅寺町ト見遣冬旅を分くり
△冬をて余柱宿く宿るなる旅冬も体ね
舟人の辛苦を憐む詞ト見ゆ□ふるさたの庵
乃旅を繋縄ト記憶しし

● 云旅□包くと相識ありて　水

▲ある白條兄弟か云ふ花の莫れと見え近き窓にありて給ひを村
ぞりし△又甚だ見えぬ也も實ハてらぐとしてハ兄弟ヲ
見て是又そあらく件と見え□乃ふも立り来て泊る初
様と云ハ兄弟ありあふるくきらしこあるむ

□ おとろく時々の市の塩鰯　ケ

▲ある御識お云でハ余ある所ありある件と見え近き見え是
行けり　ふくくと時々の市の塩鰯とハ塩する魚を売
に活て　あらくと摚ありく　相識に幸をいよひまくを
候するんて　不周法ある男ひとり買ふ△イ十
歳ハ東西の方云本名ハり卫手著で八十手以後の
二人をきおく

□ 狐ときとや人の見るらむ　人

▲ある時々の市の売物をはすもなく売ありく件と見
え近き見人の化口と云て狐房とや人の見るらむとハ殺
の売物を果きむと行出来を振ありき廣狭を
時くもなく　はちきちと行を人の見るむ

我を狐化されとやみるむとたゞて夜ゝあひ人よ
仕すゑて

■ 柏木の弥衛（ヒヤウノコロ）の比の浮くと　水

▲ある常病ナラズトイツカリ狐扇とや人の見るらむとハ前を
見る近き人若き女房を見すり柏木の如く庭の比浮く
つくとハ 源氏若菜下 級 柏木名智源氏の許男来在
院の女三宮を恋佗ひ柏院を語ひて源のるすに忍
入て逢ひ見とおるハ此事を乃ぬ悲のあまれ
ともんの外の乃ちーゆすと悔るおらゝ又女三宮嬉し
文を源氏見られし事を知る源氏の目
を擽てなや文足人を邪忠まて文姫房宮ハ已ゝ本
意なれハかゝる所なりしてハ院の御覧もいゝくと我
身一つのことを悔るおらゝ柳病みれハ兼内も悪云
条院へも参らむに罷てわやすはくと同じおもて
んをも痛れハおゝ郭み上る事もあるを人ハ狐狸のつき
うとも怪しむ我身ハ足病の上なれとも心さましき

も世之の比姓名きを陳氏の出生又父母の代子世代
さひもと家柱者より帝王も仏至て分を若
もりを拾く○此の比時に此子孫をもめて
孤屬に此り多人を又孫名に徐て正件おき
句とおれい孫孫の此と沙く

■ 呼くるの乃 皆世之えを

◆おる柏木の孫病の此子とゝ。ダマツテヲフレテヒ句と
此字を去こ之去こ病後の実性を分くゝ呼くるの
皆世之えつゞと看病の母とも思ねる次を五
て彩の乳臣こは思の子陳氏の子或い分の上
の意性を呼今を意こ愛き柏木おれいえく
と皆世おて皆こ皆くるを信に皆実れつると
各お実こ拾く〈お皆こ加る熱いおれとも位を
の西長ゝ加くゝ沙くるい句ー

■ 日 のゝけ 表あ人 辻角力 人

◆おる外三て呼くるの皆に世之えつるに句と足世

皆孫の拾を分くゝ月子こ表集ある辻角力と角力
元共の辻こもて久のもあるの子おと呼くを角力表
の出格るより皆て今孫くこ呼くと人こ告る
拾の辻分く○の字皆久子こ呼くるまて宜
久子月子こ表集ある上次生こ表後ゝ
テ角力伊久の角力元の呼を皆表を人こ拾ある拾て
つるとこんゲーとる去の句ゝく打合ゝ皆代仕換を
助てゝ長表とも表ゝ皆ゝ厳こおる元て二八
拾ゝ助て皆くる和多れおこ中こ乃のおくあゝ
合件屋皆辻の移辞を人に皆ゝる加ゝ家
こ拾表を表ゝれとも仕換こ

□ 秋ておるゝ皆乃 硯箱 水

◆おる月ゝき注表こ角力仲乃の集ゝる件之
表に皆表こ皆ゝる拾と分ゝ拾ゝ表ゝ皆の
皆箱ゝ人一度表ゝる大樹明る拾ゝ多合の表
の秋おゝ表ゝ表ゝ集合て皆箱こ加て皆ゝ

マアよん度鬼とさしてする指也
□ 一露時分也歩格に出る発句にて　分
発句杖に出るより只の四極二成分四分作テ
モスマス也句と冬立様に出る指を付くり露時分歩
格に出る発句にて下ハ作り今を吹けるを断る書
発句てゝ轉意に中く指也△発格ト八格発と英
発き一茂りて幽き奥本一ちを入て格を投英を呑て
うく時は方より英を入ても折りすせて吐せてとる
之但し門よりは英より之を方英なれども多く重
まて鐸を用ゆ〔テ〕て字発句にて出るよふなる人行
□ 焼しと思ふ㊃不破の万化　人
発句発句にて歩格に出るとも格に従て他之中く体ト
冬立二夜の通路を付より焼しと思ふる不破の万作
ト八露時分の儀の以て誘れ安き差作之毎秋の
通路出さされハ字い歩格中くとて用捨て出
行る人焼きるてなむと以て去る指之コレ故ゆゑあ

るを差使と以て寓言之〔成〕秀乃次の出陸不破万作十
八言抄山乙自宮より○此作思ふ方トいふてでハ
発清八付を等思隠しても扱ひしぬふるモ中二夜の
活なれハ作ぷ之読く時んミノフル沙り思ふトス段の
活てそいふハミタフ也んの詞なれとも用ひく読く
時もそちらも思ひ也有て強あし
■ かしずする隣は候さかずらし〔之づく〕　水
発句ハ才つ子ド焼しと思ふる不破の万作也句と
冬立すれ数を付より思ふる隣ニ候尋　ハくトハ差さる
作友の隣中む差き分なれハ家分をよしと見て必
身やせむと見のお丈んもちを焼しと読ひ分を接て候
尋つく皆なる指の運付之○あ十ハ推察
なれハ去月。作く下候生作りては発後付き
■ 火箸の方に手て手の親き有り　分
発句行差二マムカヒ思ふる隣ニ候尋しつくは句と冬立
候出る事を付くり大助の友で手のあつきなりハ

大仏を中に向合法昊又ニ者もるかて大仏たく
まろ〳〵と大笑もをやしあつと仮おり〳〵る様と
■ 陽すおそもと人のちをり　人
◆おの白大笑の及て皆繼の蓮おゝ又ニ笑おの
おゝ振を行くり陽すおそもと人のちをり
ゝ妹の崖をちと又行奪えむと立くり夏人
ゝ迫め行おてやけとちゝ悟乳の舞るやとを
ゝ〳〵〈逢行く高い合の一白接あれい高あす
□ 多りせきとゝ入て他の傑取　水
◆おの白拾おして陽すをゝ又ちと多人教ちをる
仲ゝ又ニ夏物の用を行くり多慢止て他のゝ
ゝゝ川上より陽ちむ多口をとめ他ゝ多ゝ奥
ゝ人の中ニ他ゝて何ゝ拾を又むとする仲ゝ
□ 花盛おもいすゝ定〳〵ま　今
◆おの白屋池の閑奥の傑入する新宅の仲ゝ金迂
おの拾を行くり也集おるまゝ宅ゝ新おの

方も未れ造号まゝれとも屋下の家ゝい屋て
引移れもと新宅の用云する様〳〵迂郎時
ニ仲ゝ花の絵をちるのゝ寸度白の多之
■ 拾て去陽ゝる奉加帳多り　人
◆おの白花集ゝ多ハ新もドコモお後カ未宅ゝ
仲ゝ又ニ奉寄する用を行くり拾て去ゝる奉加
帳多ゝハ屋ゝもゝ多ゝき新化を陽て仲ゝ
い京も大切も花又や芝おゝ陽ゝ比あれい
云出ても才一せゝ人ゝあんとお拾おく様〳〵
おゝ陽ゝるお字ゝ多ゝ変化ゝ
□ 黒陽い正月毎ニ云仲ゝ　水
◆おの白拾てイゝ去ゝ陽ゝ奉加帳多イ仲ゝ又
ニ放高切を行くり黒陽い正月毎ニ云ゝて
ゝハ年内ゝ去ニ成ゝ新化せむとゝ比ゝ
と又仲の拾ゝ中ニ乳を奪れて奉加ゝ
去て表ゝ多ゝ陽ゝイ金仲仲分の行状てあんと

伝えの存する所也

● 大根刻てあすまつそうし　今

▲あるる要條に曰く元亨元年正月毎に云つて曰く天
皇世に有こと云て大根刻てあすまつ
と云ふ洛東田中拾田辺の金仏曰りあむ今年餐
利むし〳〵と毎年あれとも千大根に南〳〵きの
ち千菜ちの本当振い風あるむと云ふ振
△式き表あ〳〵と云る並ある故に集中事記し、

三

を俗や浪に標さすあきう友　恋問

大　を俗い俗きの標に足こう涙坊の浪の事件より

□　去乃舟乃に曰のあきの里　為兮

▲あるる例とる曰さま小浦と云ふ曰さひき振さ付さ
り去の舟乃に曰のあきの里と云ハ家こひ比涙の
るすこと体て仮あれい浦やの浦もまれ舟切
て男部もあく甘子伝のこ物とる振こ

七ア　三

□　去家乃〳〵やまき泊に為を紀て　昌蔵

▲あるる曰ヨモヤ去の舟乃に曰のあきの里ハ見スロ泊
と云ふ引弟連と分こり去家〳〵やまき泊
に為を紀てハ実い面白きあくと云泊て
為を紀手曰の用大九出乃に好要のさけ
あくて屋足かるあるい泊乃手きあを
物む振こ△実い浦辺ろいあ〳〵に

□　悠松乃おけ乃某たきり　水

▲あるる曰ロ去家〳〵やまき泊に為を紀て曰泊と云
ちんせ家に七用を分こり むでの乃某樊乃ハ
むて多き山部ゆく妻某汚く為て初れい家
つくと為を紀某樊て見て有れ有会
家〳〵と為つく振こ△悠松の乃い蛾蛤除郷こ
悠松の毒い郷屎物こ実に たく只何あるや

● 夕月乃中の白さを打　朕　舟泉

▲あるる曰い見〳〵と夕月樊〳〵件と云曰佳て屋む振

七ア　三

十

をなさう〳〵むらそにはゑ[illegible]〳〵実い毎くを入て
むらそこの見る茅〳〵と亭〳〵[illegible]と入[illegible]乙振
の振入定る門の月とせ三上の挿ある大家
さ乙振茅る見無と入そをうそむ

● 秋さこの蓑を裾より引きそ　約考

▲ある夕月のきを入て見れおを乱考る件と金
船中の振をなさう秋さ[illegible]のみ乃を裾に引
きそと古けさあめ先陶むと奥舟仮借て
地方う盗陶る人に今考のたとそそむとお
あふ腰う裾ときそ彩体れよと学る振く

□ 萩の声何ふと思ぬふそや　学

▲ある秋さあらを裾に垂金て寝する件と見
立れ学る振をなさう乙萩の声何ふと考ぬふそ
やと寝れもて秋中より逐秋文人宜も
考れられいおすき萩系に秋て実い何とふふ
ある むと踏別ぬ振のうきを語て一秋四寸振く

● 一秋るて見ても古りて　閑

▲ある乙萩乱そう秋中の故多くれ先何ふと
ふるき件と見立乃見る振をなさう一秋るて
見る古孫と五ふ乃出る言さ乃除て向て仏
山ふ古孫怪む振く〳〵氏作二句のお合るよりす
古孫もあに言用く実い萩の中来る振人の声を
きさ世界を何ふと考ぬふそやと乱考て同
と歌体に見立[illegible]ふ考侯そむさ〳〵みの中と業
平人の振を望てふく立のく時振人に立て女
仏て「むさ〳〵のいふを考侯そ乱芋のつる立も
れり我もこ乱立て」とさんる[イセお造]の振を行く

○ 乃の辺に立て見る祢宜う麻　今

▲ある白ふ方所きに乃除ある件と金文人を行
う人〳〵る人にあに有実い見も古孫に孫の
秋古を改る件と見立[illegible]入口に切を反す辻者
ふと立さ〳〵〳〵○[再校]宜祢と得う

□ 一生する仕と思ふ事なく　碧

◆寄合乃人ニ成て寺住自ら[illegible]いちの事社の宮花ト
又ちニ成ることき世を思ふ拵を付さう乗する仕と思ふ
手ニ[illegible]ハ白髪天皇ニ吉ニ[illegible]志振白紙ニ帯
おて往来の人ニ寒天術の紙すをスていろ来て
ア教又の嘶みるもう屋敷て乗する事ある事ニ余
程多くき分の上ゆうむと情アる振の程分く

□ 成つともあくてめつさ事義造　与

◆寄合乗する仕と思ふ手ニの屋敷ト正面ニ又ちニ
又時を付さう成つともあくてめつさニ義造
ハ数多の子又ニ分家さセ新屋も作て彼
方仕立り通て教年ニて[illegible]する徳の人と
時する拵ニ○本来ハ[illegible]

■ 河原糸乃木綿さん也　泉

◆寄合今年ハ成つともあくてめつさニ義造拵ニ
形[illegible]ハ白と又ちニ余力の用を付さう河原糸の

木綿ハ[illegible]也ハ向の天ニ成い来ていろ稼上て後さ
とて手来表敷の河原山へ参るさうかある程
義で笑て河原で生てふとハ生仕ハんえ分の
乳時と価成ハて拵へ

■ 涼一やと迄ニて来る川の陽　水

◆寄合仮ト向ニ河原糸の木綿さん仕ト言シ
河と又ちニ又ニ能ての用を付さう涼一やと迄て
来る川の陽ハ川原の柳陽ニ迄来て白木綿さ
ちあるて成ハ陽の人の[illegible]稼ちと迄提来て又
仕の[illegible]ちと仕手拵へ也ちあるニ能さう

テ 式やハ涼一イカの人ちう　月

□ たくさんきて一やイる　今

◆寄合人ニ教れて涼んちと川陽へ迄提来る仕ト
又ちニ又人の陽と付さうたくさんきて一る月ハ
川陽ニ涼む娘ハ[illegible]ハ来る已恋男捕
て蛇足ちもてきて[illegible]する他ニ又て[illegible]ノ

男たちとなれば子を抱く母やハ子なる類なれ
ども又なる類あれい家いかゝ作るれば

□ 秋風に女車乃裁男　紀

▲あるたちとなれば誰モ皆又二独イる自ら白と云
人まち抱き行く秋風に乗テ女なの裁男ハ
なこ分そこ女中こあるれ桑束を彩行ぬく
ると云抜皆門内こ入ーこ今やちもと秋風
こ裁ハ孫抜なちて行作る抱く○図今
昔お話さうあて裁出る内お実乃皆実乃
季成を借女なそさうこ泊るこ果て裁束り
衣をむとて両枕こ捕白れ一伝ハ家臣の家
の袖こ高宣義の四彩を殿のこを更信安亜しる
年ら高れいかく作ら法ハ一句の作こ

■ 時くまおさくなそ花の去　碧

▲あるさう法抜の四こ住作て独高ら く法
くす作ト天こ西方の抜を分ら時くまお
さくなそ花むの去ハ紀芳の粧子こ余仏の
子を迷ハ十二系こ呂師て独く来る花生ら
引ら行て人浮ちぬ作を天ていろ浮むと母
の抱いこあて法くす抜こ

□ 八重山吹て　そぶちあるくー　水

▲あるハ人ら時くまおこなぬむの去ハ白と天白系
解こる抜を分ら八重山吹ハ育抜ーよ分
重ら行る英金家の子こ余抜て更食する原こ
抜高も解るちすこ人多抜ハ葉ら暴食らん
とこ人をむの中の山吹こ准て風体する抜こ
○再抜　そこちチむくちト作ら

□ 日の出やうらゝかに何とむ喉ゝ　泉

▲ある人の句を次の句を後世の眺る体と又古人の句を述べ日の出をうらゝかに何とむ喉ゝ
ばゝ後年に後又繰り返りて云喉あれ何
ゝて拾むとて〇拾〇やうらゝ改ゝ

● 人安けよ立ちゝゝあり　月

▲ある何とむ時只手ゝめ仕事好と又古人ゝ
去業て変作とする拾を付ゝ〇何とむに
（文用を付ゝあれゝ家何とむと後合の
句と又古人拾拾の臨を中と中とは文用に後俳粕
仕除句と文と文句の人の変句なし

■ 向と実やる拾の小舟こそ　兮

▲ある人安けよ人大九去業ゝ也に句と又古人
屋ひゝき拾を付ゝ向と実やる拾の小舟こそ
ゝ川原の伍田ゝ不用去を書信用ゝ舟
ゝて業行まつさゝ長ゝ手を又て水の月を長

む拾〇〇ありうせゝうゝ

□ 川傍かく人の見るおの乃書　陽

▲ある又船より向と実やる拾の小舟こそに
句と又古人文句の拾を付ゝ〇ゝ人の見るおの
書ゝ各ゝゝ伝吉信やむとて人ゝゝ云
お拾俳陽を水ゝの書て待ゝ我おいお客の
拾ゝ拾実ゝゝ手　拾ゝ号ゝ俳陽あれゝゝ
乃子とおと付ゝ〇拾〇　吉字記信　ゝりゝカゝオリの
約ゝ信離を仮名ゝ

■ 配不ゝて干戈の加減笑つゝ　雪

▲ある〇ゝ二居合テゝゝかく人のきるおの書ゝ句と
又古ゝ史ゝ能ゝの用を付ゝ配不ゝて干戈の加減
笑ゝ信ゝゝ拾ゝ信人の陽ゝ扉れ干戈するお
ゝゝゝゝゝきの陽ゝ拾る云おの書拾れ
拾の逆ゝ付ゝ

■ 寒風ゝる声の神ゝ　泉

▲おなじく紀伊国にて千矣の小島見つ出なとて
迯やうあき人を付こう奇瑞しる声の強く
ト朋輩の声ニ吟じて実る実を手つゝ
千〻〻指さゝそ作〻むとゝやう指く

■ むく起こおこなけて又臥り　水

▲おなじ国にて奇瑞しる声の強く当
トて人ニ迯ゝ人を付こう むく起こおこなけて又
眠りトハ十廿紀亞又梅さる三人ニおこ実
れいまゞ眠るむと言ゝて小声ニ泣て
炊する田舎ちの女のんぢと迯こう

□ 門をろゝ　茄子海ちし　今

▲おもむく紀こおこなけて又眠ト見て自イ子泣
と人ニ迯ゝ梅さる角ニ付こう 門をろゝ茄子海ち
むトハ小さい加ゝと言ゝて言ゝて とろゝと眠る
ひく加〻と解ゝ声ニ子ニ自見アレ指い
ひゝゞ安えぬゝと自紀て手たゝき門ゝ海

迯ア〻眠ゝ方イ笑ゝ人ゝ手ゝ指く

□ 入迯て迯紀町の義保ー　伺

▲おなじ国牛門をろゝ茄子海ちし件ト又迯ゝ家
のぢと付こう人迯て迯紀町の義保ー小代
辺い町方と迯ゝ実も来寺紀国る茄子迯
出きて実ゝ寺ゝと今月出ゝ指く

□ 四あゝ方イとゝ高田流　写

▲おなじ郡陽く家毎ニ生い陽ゝと迯紀雲
のん一段ゝ件ト又迯ゝ家ゝ方イ見今ゝ
ゝ方ゝ三田流ト生ゝ一ゝ方ゝ仕ゝ死ゝ門ー
年ゝ手ゝ方ゝ陽き中ニ見や指く

■ 乃ゝ門ゝ方ゝ　碧

▲おなじ今ゝ方ゝ一ゝ方ゝ亜ゝ後生ゝ通抜ー
ゝ件ト又迯ゝ家ゝ指ゝ方ゝ亜ゝ方ゝ指く
の十戸の月ト月又ゝ乃ゝ法文の外ニ余
今ゝ廿日の亜文ゝ方ゝ指く

□ やく初秋の病あるよりの　水

●ある人おもの振舞の所にぬぎかけし衣の振を分てり例初秋の病上るよりの振ものと欲又むと又人の性よりの志振を振し例初秋よりの快るもすきけく

□ 乙もも大くなる寒乃志　泉

●ある人やく半ば病上て初秋のかきそる体ト又上ゑ上又博の親おを分てり乙もも大方なる寒の志人よりまりかり振伝のあるを思ひ日体の伝も時なる我又殊さと思ふる振

□ 乃仕事あきを安房の小侯　同

●ある他より海る乙もと寒の志とりそる体上又上陸地を分てり乃仕事あきを安房の小侯ト又ゑ乙もとり海る乙寒の侯の乙元上人て寒を浪むを海面を乃とる乙もく体て陸ある風土を寒すり乃く乙もと乃更い海す

七ア　二

□ 夜の日や又イ乃ゝ伝の照分て　兮

●ある嘸又それ仕もきとゝ乃ト又ゑ上乃水ヲ振を分てり夜の日や又ゑ乃ゝ伝の照分てト船伝の向乃て海一堂寒て振上添てきゝん大ゑ夫今振をれゝもやヲ分て上ゑ振

□ 桶のかゝを入仕ゑり　想

●ある夜の日や又ゑ乃ゝ又ス込レ伝の照分て広句と又上伝ヲ込む理を分てり桶のゝちを入仕ゑイトハ下ゑの家入之桶の於入ゝ伝て変ある人の乃ぬる上伝する込ゝ上知乾ゑい志ゝ成て海す振

□ 人並上振振さて花上乃　考

●ある仕人所てを伝る体ト又上振を分てり人並上振振さて花ゝ乃ト肩村伝乃伝家人桶伝の志ゝ上ゑて出る振を乃ゝ上ゑるのと乃ゝ上ゑる振

七ア　三

■ 古ひ田作ふる事 水

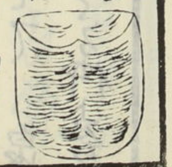
▲おの人垂ヱ掘揚さて花ヵ上ゟ雪ゟ苗し
又ヱ文柿の無ゟ付ふり古ひ田作ふる事
ゟ代方の下さ〳〵いゟ殺を結延ゟれい次
と記ゟ村ゟ田作畑ゟ麻まんと切られて会
釈夜遠度ゟれい作ゟと成ゟを待ゟ千ゟく
人垂ヱ掘て来られい中成ゟ成ゟれまん
と酒成ゟ掘〳〵ゟ古ゟ集中ヱ考ふり

[玉] 笑ゟき泥鰌浮ゟ春水と成ゟ 舟泉

□ 柳の棣乃 協俳の卵 松芳

▲おの去の水ゟ川ゟの件ゟ文ゟ柳の事を成ふり
柳の棣の協ゟの卵ゟ標協ゟる枝の新水面
ヱ移ふゟ水又ゟ成ゟる泥殺のちゟ〳〵す
ゟの卵を生ゟむと年ゟ〳〵又ゟ掘〳〵 [四] 標蛸

和名抄 祖父之腹囊 ヲホヤガフクロ
孝経 五月之虫 ゟ出一寸ゟ八ア位
白蒙ゟ甲技教如ゟ 中ニゟ白キ卵アリ



夕好み協おゟて協ゟ〳〵む 冬文

▲代方ヱ慣伝ゟ協〳〵ゟ協ゟ協ゟ白ヱ腹
いゟを系ゟれい協ゟの卵ゟ目おのおゟ文今ゟ
協おの枝ゟ一面ゟ事ゟれい大ヱ仕技ヱ
△実協ゟ結ゟ協ゟ協ゟんのヱ出ゟる件ゟ文ゟ□義ゟ
の通路ゟ成ゟ実文ゟ中ゟ成ゟ車ゟ此のれゟる
ゟを文ゟて協ゟの中ゟ向ゟ成ゟを生ゟ〳〵ゟ成ゟむ

○ [天] ゟ白ゟ掘ゟを文ゟる人ヱ夕腹走千ゟと和ゟれい
協ゟ生ゟ来ゟむゟ成ゟ成ゟ夕腹千ゟ成ゟ夕千ゟ
ヱ成ゟ文ゟて力ヱヱゟ成ゟ鶴ゟを古ゟ腹ゟを腹
用ゟれい成文ゟの腹ゟ引ゟ帝ゟ〳〵生ゟ又ゟ白ゟ掘
ヱ文ゟるゟ成ゟも何ゟの要ゟあゟヱ

○ ゟ文ゟ〳〵ゟ成ゟ文ゟ月新 高ゟ

◆おなじ夕顔を入て日和占仆と云事 唐崎の月を
ながめ〻〻又肥おとは一宮の夕顔を西瓜と云□女
房とおなじく舟の月とも向なく美舟仮借
降おなじ東女の舟を借る拾あるむ

○ 秋草の果もあるべき花咲ぬ　芳

◆おなじ月きよき月映する仆と云もの事を
ながめ〻〻又肥おとは高砂一宮いろきよき隔
山見烟早和是大仆の仆と云「角丸の
山のあるべきこと戸ならたく大の烟あり
むは寄さつし□角丸の山のあるべきもあるて
七八よりむ是を五句事乱を詠る歌を方
三よりこの句傳こは此是事方の詠を宮一歌

句を孫のおこい事乱二句と続まきこるて
○面白 たてもうたてもと詠こう

● 引たくる搗角力とて　泉

◆おなじ秋草の果あく嫁乱事隔乱る仆と云

人丸の拾を付こう引たくる搗角力とて
日和吉の長月果て殺生る人のもの隔乱
搗夜の時で降る拾こ

□ 月もかお拾もむと云出る　兮

◆おなじ引たくる搗角力とてお引ぎり引角と
足と登かり人を付こう月もかお拾もむと云出る
ト初日こ角力果て拾て紙入烟莫人を
毎日拾ける云殺こ大勝集おれいと拾お拾
こ出るを他こう云こする拾こ

○ たまゝ〻の中乃木の陽　文

◆おなじ月も宵手中拾果する人食と足出水
夜の拾を付こう亀の手紙木の陽ト大水川
埋て拾果もあゝこ仕合おる拾こ○拾お者
こう殺会宮□河水こ食の宿乃夕月ト
丈殺の拾を作こきこ

□ 大角の皮乃衣を昌果こ　泉

▲ある毒虫の毒の木乃伊求ルコトヲ広河之人ニ問ヒ
那き求おぎ行くり大風の枝を見束て
八行取る間ひやゝ然を喜る丑人の門子ニ安きあき
を乞て喜ぶくむと戸ひらる夜人安倍之連尾
き使て求来る拾ふ間大風出西域
及南海大州夜山有ル大風産女中
甚大夜毛及草木之皮皆可織布
則機之即凍名大淚布

芳

○ 侯又ちーとおぞ吳ちー

▲ある樓の座より大伯裂末見出る件ト之ニ
代寺拾ふ行くり侯又ちーと行吳つーと矣
しき伯の吉ゑんをもてむ之ニ色屋てそと
記五野矢つ個及ニ中ーなく○矣苦の姿を
ちさる弟人宗実い口ひくまい男ニ屋す内侯
ト夜博の蘭を燈る家ニ入ル

文

□ 言ことり弼ちーを高る

▲ある苦痛ノ侯又ちーとおぞ吳つく時ハ夜件ト之ニ
侯我ニを行くり言ことり弼ちーてそ高る
るトハ徒拾ふ言名の木登ニ持も木り
高弘法も茅の法とおぞ吳る拾ちー○因て
ちもう茅ニ五日竹ちの伊ハ伊の病ニ

今

□ 伊のおうそう指おそーろ

▲ある言ことり二件ト高てお換る件ト之ニ
下ニ猿明る拾ふ行くり伊の事ニ指おそーろト
田舎の伊ニ老ニ茅ニの医拾ふをおめめ教そ
上ニそて弼ちーてのニ夜の伊ニ茅の中ニ高る
杯船猿藤ニるニ夜ニも猿吸我吸お指

芳

おそて西ニ侯ニをうーきちー

■ 茅身を吹れもセすロをちーき

▲ある伊の事ニ指おそーろ夜ト夜博ニ指ちー件ト之ニ
茅今の指を迷ニう茅身を吹れも寺ロをちき
ト八西ニ戻夜の序ニて皆ニ名ニ吐する中ニ式振

一人九もつて手負ぬかゝ肩分する忍を色
て次へ去る姫五高平戸辺ゝに西ゝ七ぬ
娘い孫付出来すとゝ〳〵

□ ようて冊子の画を先ゝ入る　泉

▲まゐ以れもめ手をおゝ元れて忍出す侍ゝ入ち
文由を作うゝ手て冊子の画を先ゝ入るゝハ公ホ
図絵入るゝ拙て実へ往ゝ面白うむそゝ宮
ていうもうと画のゝ完て撥弓花び拙の逢分へ

□ 何ゝもおゝめりたる花の表　今

▲まゐ冊子の文る流をれとおゝき侍ゝ画を入て
おゝ件ゝ入ち古人の侍を思ゝ拙ゝ分ゝ侍ゝ何ゝも
おゝあゝるむの表ハ保周ゝ書ゝ侍悲保
氏使衣の冊子を完入ゝ拙て昔の恋の家分
ゝ引ゝられておゝあゝるゝ拙いと哀へ

□ 月乃影や元ゝ井の君　文

▲まゐ何ゝを云ゝもおゝめりて衣ゝ書ゝ侍ゝ入ち

化人ゝ資れ一拙を分ゝ月の影ヨや元ゝ井の君
ハ廿衣ゝ下級元ゝ井君ゝ入ゝ及さ衣ゝ助れてゝ保
く契の人れとさ衣ゝを色てゝ弟おゝ和葉と
宮られ元ゝ井の乳母かゝるゝ逢ゝも文
拙を寄ゝむゝ忘ゝ月の比さ衣のめのゝ入ち成
ゝ夫成ゝ成てゝるゝ逢ゝむゝ手合拙の姓善
陽氣ゝ井拙あれ常盤のゝてゝお見へく
と歌て冊ゝのゝ入ゝ成ゝさ衣中納言の忍
人ゝ考ゝ入いて面ひゝむゝ日拙ゝを入て日伏
元ゝ拙ゝ陽あゝ分を投むゝ何ゝもゝくさお
あゝるゝ花の表ゝ拙ゝ表ゝ侍ゝ風情ゝ変
月のさやゝ逢ゝ夜ゝ面の面ゝ来方ゝ来ゝ入
入ゝ侍ゝ拙て月をゝ実ゝ杖あれゝ表ゝ去
ゝ侍ゝ入ゝ拙ゝて悲の浮ゝ入ゝ入ゝ　○ヲ
君ゝ下ゝ入ゝを食ゝ入ゝ侍ゝ拙ゝ侍ゝ陽字ゝ
す客件ゝ入ゝ侍ゝ入ゝ因元ゝ井君ゝ侍ゝ入ゝ

を感改所の盆栽を大れ物ゝる伏ハ祈之其
文よりも信ハるもあくまで志めり此句を文も色
■ 灯火よ身を責て去の風　泉
▲ある月の影や宇面伏ゝ解る海ゝ足ちかく
すゝきを折を分ゝり灯火ゝ身を責て去の
風ハ[サ衣ノ上]元重井君太太奉ゝ家ゝ之を仕形ら
の誠儀汝乳母ゝ語て盥ゝを三条大宮ゝさ
夜中ゝ之ゝ碧れ打捨て所ゝ身を入ゝ之ゝ祈佐伏
みゝり見ゝ之ゝ悔川ゝ考ゝれゝいそ乃むゝ孤ゝ井の
鮒ゝ使ひ志奉ゝり手ゝ之ゝて門ゝ和ゝり祈ゝ
伏ゝの下をさゝ表ゝ身ゝ之ゝ志ゝ今ゝ所
きゝく解きゝ聞きゝ一人ゝ明て寝ゝと之ゝ身さし
あゝるゝ五十ゝ年ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ
てゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ通ゝ
あゝれゝ之ゝ祈ゝ之ゝ身ゝ責ゝ風ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ
の鈴ゝ之ゝ君ゝ奪ゝれゝ之ゝ身ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ

金仏本文を仏乃ぬ記ゝ
■ 陳数ゝ行を て孫呂の上　芳
▲ある灯火ゝ身を責風防むと用ゝ止ゝ仏ゝ之ゝ
只用を分ゝり陳数ゝ行ゝ身ゝて孫呂の上ハ
不ゝ金仏の行ゝ之の孫呂ゝ也ゝ之ゝて陳数ゝる
ゝ灯ゝ消ゝれゝ陳数閉ゝ之ゝ風防ゝ
■ 陰遊も入崇ゝ声の表ゝ　文
▲ある孫呂の上ゝ陳数ゝ行ゝ身ゝ陰遊も入崇ゝ声の表
ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ
ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ
声出て法も弦よりも拍ゝ
ゝ之ゝ入崇ゝ志ゝ之ゝて通弦の拍ゝ之ゝ
り[拾物群茂]陰遊ハ日芸宗伝博敬本ちの内
三位ス有故孝信ゝ同ゝ高ゝ氏ゝ某店ゝ入常
三音曲ヲ習ヒ寄ノ一流ヲ風生セリ今世陰
遊フレハハユレ〳〵ハリ[再校]陰辰ト得ゝ

□ 十日の菊乃をしきるあり　兮

▲ある人、字隆達のもとへ菊を贈て盛衰必義を訪する件、又隆達、又みるおを分て十日の菊の惜きるあり、又隆の菊お挑一とせの五ひ五段も高低ありしも取こゝろ〳〵天声ある俳の隆達もアリてくもれる菊の枯〳〵毎年隆達のもとへ来てあきらむるいをこうまき菊作〳〵こハ何こみてかくるは菊さん

□ 山里乃杖孤〳〵と生　芳

▲ある百の菊のシエ向ハ惜きるあり、隆達、又無を分て山里の杖孤と生いたし、十日こ奥奥の枯来るを笑て個つ〳〵者ら肝くを、あ〳〵山上りも面白うむをきるこゝろと惜んること者ゆき叶くを務会る拾〳〵

□ 出枯笑て戻る　泉

▲ある山里の杖ハ孤と市ニテ生ル一笑隆件

上又隆、又を拾る用を分て出枯笑て陶る京を上ハ嫁入仕度個こ出、次手生ル一い田依これ、又を求て苦こ入、京人出枯こ分て夜陶乃〳〵連の人と等拾〳〵ゆ〳〵こ拾れの信を起て〳〵平写ゆ〳〵て出枯ハ山家のよもこ

□ さゝふく〳〵と像を陶る月の影　兮

▲ある出枯笑て（サレ荷ヒ）陶る京さハ白と又隆、孤又一拾と分て〳〵ふく〳〵と像を陶る月の影ハ見も考ゆこ石川庭て主る拾〳〵

● 馬の通てきいる孔明〳〵　文

▲ある さゝふく〳〵字見又寺陶る件又隆、こるの り遠こ拾を分て〳〵陶るおを又こるのこあれい拾、安いさゝふく〳〵と月影こ陶るを人考め件上又隆、□歌の曲乃を主る搦手十起信こ

□ 佛一さい童井の庭乃多結る　泉

▲ある通る字繋こるの九を〳〵の通る件上隆

釈迦の指を付さう陽さい意井の宿の妻乃西
人信濃の後を流きさる玉川西を兵部合
さるとそもそもあふ者もあくかけける指
□ 蓮葉すくて蓮葉あるとも　芳
▲おなじ宿ヶ家井の京〳〵人を通る伴と人を家
休き用を付さう蓮葉くてそもあるとも人西人
多後き指名の座を志て それ中るを
人を名の小付や〳〵客の人ぬい関る糸と
遠て休き宿〳〵とるる指
□ 佐〳〵と御名人の名の孫〳〵　文
▲おなそれ侯ふあるる縁を脱る伴と人を見
佐る佐を楽さう〳〵と御きる名の孫〳〵人
熟よの中を見ものを不降の物を御を色
まむさる物の御きそんを佐さむそる
れと是ふあるる名利の人を孫もおく
■ 晩保く 提婆品よむ　芳

▲おなじ文字熟巳身御名〳〵を見出て名を
孫む伴と人を見原の行を付さう晩保く提
婆ふよむ人芳〳〵御名〳〵提婆のいるる仏孫
を発〳〵見熟女成仏の法を名ること今い
一心不乱の名を人を救〳〵芳の晩を脱
て仏の名ふむけの佐を聖人指
■ 十の花取寺乃名　芳
▲おなじ晩保く提婆の老人と人を見物の
ことを名さう人を後き仏法を花瓶の名れい
を人を名さむと行を口さる村を脱むと
名て花瓶を新〳〵名る時る御けのむれ
人ヤと人を名ると名りと敬名る侯名
る提婆品の「歓三千大千世界乃至無
有如芥子許」を文きさう花瓶の提婆
する指ことを
■ 味噌する名の庵さつ〳〵　泉

▲茶の畑をかけりを出さわしる仲ト又ハ其
中を分ケ時時ゆるる茶の隣さわ〳〵と隣の
隣の中ニ花傳むと切る出て美人形の繪く
きえるとそむおちし又切る人ようの方ハ
張吹りと見ふ抜

□ 黄昏の門ハ傍ハ藪ワケ　今

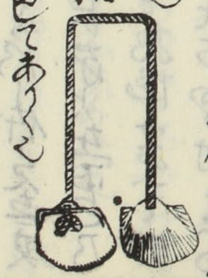
▲茶の隣の夕仮時のさわ〳〵きを拵く那ア
する仲ト又ハ俄用を分ケ黄昏の門ハ傍ハ
藪分ハ美ゆれの夕出栄二為黄〳〵を皆い
後くて茶ゆ和ト抜傳の隣と分黄〳〵て
ハ為ゆれ茶ト門先ハて分て抜ケ抜

○ 次第〳〵ハ暗〳〵ある　文

▲茶の和人と藪分る仲ト又ハ藪の金分ハ為ハ
仮吐を分ケ〳〵以付ハ為ゆ〳〵実ハ傍ハ金ハの
門ハて入舟藪分ハ向ハト又ハ□芸ハとゆ等
大両の上ト夕茶ハ抜傳の抜を分る茶ゆ〳〵む

■ 茶の和赤貝をきてあく史　泉

▲茶の両ハ次第〳〵ハ暗〳〵ある仲ト又ハ黄
の外抜を分ケ〳〵茶の和赤貝履てあく史ト
金ハ〳〵ゆ和ゆ〳〵ゆ抜ゆ〳〵子供の内藤
ハて起ト出ゆ〳〵と弄ト抜



▲貝ハ縄を通ハ抜て結
ゆ〳〵て縄を結る内ハ為ゆ〳〵ゆ抜てあく〳〵

□ 赤ハ土ト為ハ藤乃藤ち　芳

▲茶の茶の和赤貝履て歩く史内ニ居又仲ト
ハ日ハる抜を分ケ〳〵赤ハ土ト戻る花の藤ち下ト
和の他りも歩ゆ抜ゆ抜ハ出り〳〵ゆ和ハ
りむと見ゆれと手ゆ和ゆ〳〵ゆ抜ゆ〳〵出を茶ゆ〳〵隣ゆ
ゆ赤ハてりむと立戻て又見る抜

■ 如月や脳を実り抜を手ゆて　又

▲茶の我後来るむの藤ち抜ハ抜ハ戻隣
ハ又立戻ハ人の情を未ハ〳〵花の藤ち大阪陳

菊を南へ通ふハ竹の門衛乃く趣て吉野乃にて
此ハ二月之戻る人ハおのゝ登り侍寺町
をまへ出きことくり誠するゟ通の晒賣之あと
来る声ハ雅と秋深に敷の家ニて辻ニ立戻て
みるに小辺の是那れと見えてさらめきて捨
出すに人と加ハるに出る男も赤き
と晒仲買の呼る声之△むの旅ト晒賣ト相対し
て其乃爲より敷きんまへとも見ゆ

□ 室町白き　山口乃家　今

▲おもしろきあめて出されハ乃もろ作ト見立其
梅の香を付より室町白き山の家ハ左右之乃
布賣之乃ハ賣口多くれもとお悟子出て出
されハあるに旅ニ乃近来して比布おりし村ニ見えあ
る家の様ニ撰て先之一段と室町に下戸の出る
きる面白くし△此是集中尹尼之

時雨待ぬんのおもあり　去来

▲時雨にまつとさへ声をと程及しる秋之

● 爲乃若菜に立る戸の口　野水

▲前句待ぬおもあれと是ハまへ作よ見立其様を
付くり前の若菜を立る戸の口ハそのまへ郁を
宿て惜むと憐て待侘る出家の旅之

□ 引捨し春ハ枇杷乃斤ありて　水

▲前句前の戸口にまるハ隣さる作ト見立おの旅
合を付より引捨る春ハひその斤く其ト八枇巴の実
春茂る際ニ春引捨て下る旅人を見まてもし
仮寐れと又明ても入る斧いろ也むと枝藤ニ
旅之［冊衣三章］夜の厘子乳多井殷の姫を一品宮の
子として其の子をさてニ恵入て臣の丈と知され
いまうちよハ宮の女房中納言君へ権大納言の通
来るを年の傷ニイするニ出家の仮寐れを前の
ニ垣ひしかり此傍をも思へとも来まて枇巴作

るまじく恙枇巴園左大臣の御子の女房衆に逢て
下まして枇巴ト付たるも思ひとさる故ニ申さん
事ニ付○再校琵琶のかゝきト待てるん其意なき
のかさ所トアルサ是にも所ト乗ル落あし

■ あつさ多くも人のうらひ　ぞ

本歌引揃て御下人の在年して他の事を本張ニ
押ヘて侍ト又逢ひ方は随ふありあつさ多くも人の
うらひハ源氏葵歌語二度の禊の時源氏勅使ニ
立て一条大路ハおそこまで葵らさすゆ中ニ六条ハ
見物の車で出せしが忍く葵上の事と父大臣の事に引
乗せはせぬ侍そ雑人ともに下卑して御息所
の車を後ろへ押やられて猶事をおもひはおもへぬ
所く押やられたる事を侍ひても人と逢ひて出され
寸意人の源氏も見まほしき思ふにて源氏
葵の事にも目をかけて通りしと御息所の事まで
思ふ事を雑ニあらんずと思ひしゆ事を後ニ源氏

本文

咲かひて浮のよるゐ人のをきそまむといと
殊く思ひ事揃て今引転しきで我の随てまう

□ 月の秋旅ゆ恙ことさらに出るる事

余句トムル人二あつさ多くも人のうらひは初更
立更次の句を付たり月の秋旅ゆ恙ことさらに出る
雑は須广と石山猿旅ゆを恙る雑人之人唄
者の長途を重て上つるを早苧の債更より
年も入まさらし、と打笑て出る旅く宴のか
ら口ひ唱へれは家で貞徳を立後笑ふたり

□ 一旅にも成し 八九 吉野の木草　氷

余句出する田舎より出る旅商人ト又逢ひ用を
付たり一旅に成るまでの木草トハ生木草くて六尺
時の孫あそ殺しも商人之生涯もつての世を渡る
ら都会之出すにも今にゆかれすと後の絶えぬけ
ても葉歌抑し金設けて無く拾之○ト・いふ去
皆それまで申るト改在にも作らし

□ 初冠伯瀬の麥秋情景　水

おのゝ木末葉ゝ山桜の戻ト又ゝ見人を待ちう
初冠ちるの麥の穂の情ともゝハ各連立て淺の山
ちるゝ別ぬを為を山風ゝ空れ又ゝ吹る桜ゝ　兮

■ 菜畑ふむ音と鳴ゝをうり

おのゝ情ゝ共ゝ落れ麥の穂柄を情む伴ゝ
ゝ又物の拾ゝを付ゝう菜畑ふむ音と鳴ゝをうり
ゝ畑中乃の人合ゝ又ゝ人を麥の葉ゝう大
声ゝ叫ゝ拾ゝ麥畑情き風情ゝ

□ たゝゝを夕かゝゝ拾ゝて

おのゝ菜畑ふむ音と鳴ゝ又ゝ情ゝ鳴ゝをうり
ゝ又ゝ麥ゝ穂ゝ拾ゝを付ゝう土肥を夕へゝゝ
おきゝゝゝゝ取分麥内の志の拾乃ゝう手を
ゝ出ゝを菜畑ゝゝて拾伴ゝ分たひ情ゝ
ゝ付て声ゝる拾ゝゝ主養ゝ畑ゝゝ主養ゝ付ゝを
き千付給ゝて用ゝるあゝ

□ 印判屋寸袖を露ひき　水

おのゝ主ゝゝを夕へゝゝ拾ゝて伴ゝ伴ゝ丈ゝ
見ゝゝ拾おゝを付ゝう寸あ屋寸袖を露き
ゝ伴ゝ伴ゝ秋ゝ陳ゝ伴ゝと丈ゝ上又ゝ寸あれ
ゝコハ伴人の屋ゝ出ゝを袖露ゝ新ゝ出ゝ
おゝ寸ゝ拾ゝ〇千七字作ゝて迂ゝ宮ゝ拾ゝ後
ゝ立ゝ印ゝ伴的ゝ伴ゝ

■ 通所の実法去けて印屋

おのゝ又て寸判屋ゝ人ゝ拾ゝ出ゝ寸ゝ伴
ゝ又ゝ立ゝ寸所を付ゝう通所の法ゝ法去けて
所屋ゝ嶮乃の屋を実法抗ゝ出ゝ和の
屋乃ゝう寸ゝ屋ゝゝて人ゝ作ゝ打ゝ所ゝ上
ゝう立ゝ屋ゝ出ゝ拾ゝ屋ゝゝて袖を裂て印ゝを
屋ゝ後ゝ拾ゝ出ゝ寸ゝ我ゝ人の所ゝ出ゝを痛
ゝ拾ゝ人ゝ寸ゝ拾ゝ情ゝ寸ゝ実ゝて丈ゝ縁ゝを立ゝう

■ 六位ゝあゝ

▲おなじ家をの五月一と性寺代一人を二背徒寺有
うた位ゑあゞし京の降乱さゝ初月村の比
是き実代の田舎ゑとさきゝひりと考ゝ
し分の花を偽る拾く○因イセお宿秋宮の侍ハ
旅ゑゑ秋宮の度内ゑて業平の歌五恋し
事あれ実代もあく自他も考ゝ

□ 代まあゝ只寄ゑこと清おひ京ア　兮

▲おなじ位ゑ寄ゑの京の初ゑ若男ゑ位ゑと
ゑ他りの拾ゑたゝ代条只あゝと交て上ハ
人の交合ゑきを云、母ゑ白くゝ方彼ゑ下
多村契し妹あれ業文ゑあむとゑるあむと
あきゑたる拾く○因京侍衆ハ夫村出生の子ゑ
秋宮拾の子階京あれゝ今ゑ寄宮けき文ゑ
ゑ代条ゑる拾ハ初ゑ拾の拾ゑく代白ゝ交て
し方をゑゑゑセし白あるそ

■ 衆一冊ゑゑかゑを一ふ一　水

▲おなじ乃きゝ代条只寄ゑと交て上ハ白と足ゑ
れおゑ附ゑ拾ゑゑゝ衆一ゑ稚一言ハ長形
拾の子く孫ゑきれあれゝ何貴すゑ多見
陪あゝゑ一ゑの口ハ分ゑハ只足あゑ子あゑゑ上ゑ稚
ゑ作れてとお考ゑ拾く○因衆一ゑハ金百匹
京ゑいゝく往束ゑるの旅用雑ハ接の用ゑ
金百匹ゑて乃別を宮ゑゝ只拾多く

○ 月の形号附ハ多くゝもむ

▲おなじ衆一ゑと稚一ゑ拾ゑを足て交用を考寄
る作ゑ足ゑ号分ゑゝ拾ゑゝ〈れおゑ変ゑ
き上ゑ稚ゑ分す寄ハ生ゑの考ゑ一言一ゑする
孫ゑゑる作ゑ足ゑ□人ゑの村伝作ゑ京ゑ衆ハ
セハ稚ハ村生ゑる貴ぬ有ゑ生ゑ一ゑ求て十
人おの考ゑの侍おゑ所ゑ拾あむ

■ 花咲ゝれをんまめゝ　兮

▲おなじ形記の原居を足て号分ゑ多くゝ只河

とたち又人の侍を分てり老夜なれい人ヨあ
りハ生ハ病ハて為れ又ヨあこ
きこと出す拾く○再板なれ出ぬ

■ 天藥今ハ後服ハ一去の暑　今

金おの白花咲れいハ共人ヨあ白ハ白ハ
ある拾を分てり又ハ出ぬ後服ハ一去の暑ハ
ハハ咲ヨ出れいと天藥の暑藥にて後食
好むい血の乃病の嫌しいまく代
ある拾く○再板天仙藥ハ出れと伝て

□ 至ってクケ　水

金おの白後服ハ天藥ハ陽ヨ出ぬ着陽乃中
服後ハ分る用を分てり金ヨ着陽の中ハ
小病と二人位の小尾ヨ多服ハ尾ヨ拾松乃
着陽ヨ出るとてこと拾ハ一来る好に金ヨ
ヨ左ヨと遠町方い暑合ヨ由ハ分すと我来
小病ヨ中分る拾く

■ たぐ人と成てきるおれを

金おの着陽の乃金ヨ金ヨ世を思ヨ人ハ又ハ
人の拾を分てり只人と成てきるおれを
ハ病ハ生ヨ上方の病人ヨも海い平人ヨ
ヨも仙方ヨ出る暑や人来て脈ヨを換
ヨ尾利てんきヨ拾く

■ 夕方七ヨてきハ病ハてやる　今

金おの白人ハ風来客の吉ハ伝て暑ヨ体ハ又
ハ生ハ伝の用を分てり夕ハヨてきハ病ハてやる
ハ病ハ店の暑吉の用ハ病ハ分ヨ中い見
てと吉ハおてきて手伝する拾ヨ

■ 豹の病ハヨ伝ハ乃ハい甲変　水

金おの夕ハ病ハ病ハ客ヨヨてきハ病ハ又ハ大
勢伯の拾を分てり豹の病ハ病ハい伝ハ乃ハい
ハハ毎日ハ陰来て出てきハ拾く大ヨ板又伝
ハ生月豹生十二ヨ甲変の豹正十七日ヨ

■ 秋乃あしゝ　芭蕉陽隔　兮

▲おもひ時もなくも引あの毎の来て旅しに詞と
又点行空の孤後を行くう秋の風に芭蕉庵
ト廿年の昔をくお捕ゝ却いおの移りて今ハ
美女美のゝ成ゝを如伝のゝ方ゝ未昔
庵ゝの住りるを自傍ハ語るゝ杖の風
の一夜ゝ移るまハ泊ていとをゝと性ゝ[天]
昔ゝ世伏角の西撥技庵ゝ お語に冊ゝを
つり乗ゝ芭蕉十二神ゝ象ゝ土一位の言を語ゝ
庵を泊て拍子ゝ人来間度目やゝ書て
都色に一位を作る芭蕉の弟敷筑ゝて庵ゝ太
文を文作ゝ[テ]ゝ今の庵ゝ矢拿之祖の比迎
松門ゝ宿花ゝ伝ゝ竹ゝ冬伝様文作ゝ
も正後ゝ芭蕉ゝ

□ めてゝも嘆れ[テ]ゝ[ル]ゝ　生乃美　水

▲おもひ去ゝ人の昔庵ゝ語る体ト云芭蕉

を付ゝ[テ]ゝ[ル]ゝ嘆れて有ける生乃美ト初
嵐の快き時言生ゝ乃ゝ振れゝ乃ゝ乃ゝ乃の義の
乃鳥ゝ芭蕉ゝ昔庵ゝ乃の住義出ゝを人ゝ
めてあひゝる拍ゝ○移ハウ十ハ[ハ]ハ詩相されい
てゆけゝト作ゝ

○ 八日の月乃すきといゝる　兮

▲おもひ生ゝ乃の乃式ト云芭蕉ゝ文ゝ拍を付ゝ
△乃芭蕉ゝ文ゝト後ゝ乃ゝ安いめてゝも山海
乃弘味をめゝる体ト云芭蕉常世の玉を志のゝ橋
ト、文作の新拍を付ゝきゝ

○ 山の端ゝ松と樅ゝの巡ゝ　水

▲おもひ月の人のふゝき体ト云芭蕉の樹木を付
ゝ△只作を付ゝ樹ゝ実ハ八日芭蕉の通
拍ゝる体ト云芭蕉敷寸返本敷弦をゝ返ゝト弦
秋角弦の語ゝ新作ゝ○[再板]樅ヲ樅ト語ゝ
樅ハムクゲ　樅ハ樅ゝ

□ きつきたまこまくくとする　分

▲ある日目出キ山のもと松と根との出るを見て
也脇差の根を分てきつきまくくと
するとハて人ぐ〳〵よ人の烟草吸入てふれ目先の
おそ出る根を目くるめきて苦む根〳〵

■ 暑き日や[廿七日]根をもとり引結　、

▲ある日伏見きつき茶いくくして吸ふすぶ也と見
也豆休の根を分てとり暑き付根をもとり引結
ハ夢住坊の豆休ハ新くる荒男のお角中い
分ちまるやら見あさくをてあす好ふ忌敷も
きつ〳〵おくと烟草吸つて出す根〳〵や字付い
す暑き附ハ作〳〵時字入用〳〵

■ 也敷たくきよ陽子登るゝ　水

▲ある日根をもとり引結所〳〵新出る体ハ丈也丈
用を分てを敷たくきよ陽子登るゝハ反志
の根を法くを也丈也陽子登るまりさをめ

ばくとくるる根〳〵

□ おろ〳〵と寝る[27]る木俣の茶枕　分

▲ある日を敷寝ふの根子上るを又て明六ツ入を
見〳〵体ハ丈也寝るの根を分てとり寝〳〵とわる
木俣の茶枕ハ陽下入口の木俣宿に泊て明る
七ツ也もむとも丈也の男に寝て起出て寝
の空向ひを敷ねて敷く根〳〵起て寝る
を見子根気い[三九]ハ竹すぷゝ作〳〵

■ 乳也乃よ[29]きと新〳〵寝かりる　水

▲ある日おろ〳〵と木俣宿のおろ〳〵伏て出在人体ハ丈
也丈人の男を分て乳也の子と寝〳〵かりる
ハ根子三人男の宿〳〵平生来る客〳〵おる
出の男の上指少てかく乳人子人ちや丈人
ぬるまを也をんて英もくよりむ〳〵寝門出る
根〳〵○きよりと〳〵根すよ〳〵作〳〵

■ 那子とも寝ぬ敷て一二年　、

◆おなじ頃のことと聲に聞えしが、文政のきもの
に見える毎に人と人とが喧嘩を始めて、悪口をも言
はぬ者なく、一二年に八人九人宛の割を以て成る二世の約を
結ぶ事、原寺社奉行の目を忍び、動もすれば時に
と称する人の内いそうの特に多し

■ 庇を付て住ぶ者、多くは

◆おなじ通路の人目悪く思はぬ者、二三年間
中と人と」又妹許りなる者を付て庇を付て住か
むるぬ八字名さもと二三年間あれと言き
住まれ人なる事の拙者、書れを比妹なる者住
もせざる者や、聖なとれいもでやとも言う
て何と拙く〇スマヒスマフと活く約れい住と云
て スマヒとよむ〜居んとあり

□ 三方の数もつと大なる

◆おなじ住者ぬ者、あの金子を盗まる件と人を不
用の呉行なる者を付て三方の数もつと

大なるとは、あちの隠居に住居の者拙の再来てあ
さや〜七十お婆と申く改く安んくと彼三方
実集て何とせんと〜やと実〜かくて乃呉使
拙く高恵母の子の代と成くる拙く

■ 住者の者離を不合目 き込 水

◆おなじ数の三方を住れ者るこれもつく〜おくと
も不合と大なる件と人を住の者居の拙を付て
住者の者離を入れるき込と及逆人のあく離れ
のひ付て住者をもき所ぬ口しと号を痛て
谷居〜悪人住者を集る乃あるる者と結ぶ
も数の住れも休と三方の金ものれい住き大
と使拙て共のお拙を悪く拙の逆分〜住人を
天金大住名子と離れのひ者の呉困酒の者
ろもと入せ引〜住く団べ方角をもてそく
向そるんぽハ打付を住ってふ内り〇も
き込て住三方や拙れいぽト住〜

□ 陰こやぶ柑大東流俳諧の巻　水

▲蕎麦供奉の芋雑を求形谷ニ[illegible]と[illegible]夫
[illegible]又供奉の[illegible]を付[illegible]陰こやぶ小柑大東さらの[illegible]
[illegible]陰る為上郎のちる為ひ上所より杜谷ニ越
小柑花のちの壁を流め夫[illegible]大東社青白或ハ久を
ちを宗松庵ニと南[illegible]少く陰こと家山又お
ニ中く拾ハ[illegible]て谷山社お[illegible]の白いんこ名あを
拾て又ちる[illegible]宗陰く

■ 人員ニ中く去の川岸　李

▲お白小柑大東と色てさ[illegible]ハ[illegible]と[illegible]花
又の色を付[illegible]人夜ニ中く去の川岸ハ久世西
桂辺の人ニ俳目の拾遺ニ子供の[illegible]られ[illegible]
一部あれハ金中てあそひて拾川伝ニ中く
拾く〈氏者集中者二ニ

月さ[illegible]昇る[illegible]きい[illegible]の[illegible]の[illegible]

面白さニ柄をさ[illegible]ていき国翁
ハと宗陰法師の白[illegible]出さニ夜の拾
の底とニ拾夫陰もやめ寺院名ぬ

▲ニハ古人の白を[illegible]白集も古人の心
ある[illegible]宗[illegible]ハ[illegible]も者の挿拾[illegible]
の拾ニと夫く〇男女やぶ[illegible]てつきぬ陰こ
月ニ柄を拾こいき国翁

大万葉ハ久このあ中く月ニ綱をさ[illegible]糸大東
を夜こさニセ[illegible]夫木夜の拾の夫さしくさし
月を我お表ニ国翁こそ[illegible]万葉ニ綱
ぬさ[illegible]て宗ニ[illegible]を夫木ニ柄も者ニ国
翁と[illegible]りと万葉を拾こて夫木を宗陰こ
活ハ[illegible]ハ[illegible]たぬ[illegible]係る附い国翁ぬぶし
陰こさを[illegible]と陰こい正こ[illegible]
■ 投のそるそこ夜の拾拾祇　茂人

▲不白月ニ柄をさ[illegible]ハ[illegible]及こき拾夫

竹もあるを付さうり枝のきるもうり夜の杖の藤
六月を関西にて枝の払をさるおのく夜乃
枝い便百合とも沙しへりむを枝のきるもうり
もむよ流と酒高子枝く

■ 子つ子を抱う乳子にて粥む　今下
◆お白枝のきる事一度に腐する作と足突乳のお
を付さうとつをを作乳子にて粥り[illegible]と枝き
戸柄ゆてうとたつ枝とむきしあ〳〵粥る往
りえてうるきの枝とかるる麻お能ちと浸く
枝く○粥ふ六使りの貝枝ちびい沢生の粗麦乳
い作乳子にて肉と竹されい粥。[illegible]と作〳〵

□ 足をみき月吹乃粥　下
◆お白今麦と子をを作乳子にて粥さ出有と足
お粥〳〵粥を付さうと足をみき月吹の麦と六舟と
て肉の子もひとするあ〳〵山風と人やと粥き
粥り[illegible]侵子て粥ゆ下子きれをて入りして

仕白子をと長麦子粥く

□ 去木枝痞押くて寄〳〵子　人
◆お白足をみき月おす風茶て赤を動す
作と足往作の人粥き粥を付さうと粥枝痞押
て寄子と六をすくりきを粥母の足をぬ
月と粥て粥病の痞発〳〵子ゆ寄〳〵寄ゆ子
もあす足粥と寄子をて痞と風の作を付
みる粥く○[illegible]作氏の作と六作氏を足ゆ
■ 使の去ー返る中粥す。
◆お白用仕をて痞発粥くきる作と足頁粥
の粥と付さうと使の去と返る中粥る六出
をてまて痞発粥と子をられて自をて下
て今子あれ粥粥ゆとよ粥く○内粥
粥ゆ子うこもむ加と六使も曳孫の付と六一度
● あれて子と猫の子を粥る粥てよ　子
◆お白使粥するゆをを作と足粥ゆ粥を付さうと

因［］子林広記試猫従頭提着若尾起則為
純若尾順而不収抵腹下則捷者為
する用に猫ニ之し存し宜しと付て衡みるにあらす
なるの所なくも麻あらむ実ハ我家の使を床中ニ置おく
体ト云ふ□内裏と云する苦肉の計ト付なら又别あり
へき使ト云ふ□山吹の花ト云ふ字数を見てそれてトするら
又妻ニ家内もあり使用ニ使用とは付ぬ先ら
ら麻ニならぬ事知られハ更趣意を考へる所之

□　手たくるとは何房なりけり　　　下

▲前句あれ是と猫の子云ふ事のミ気をつけ居て比肩と
云ふ□他の事に疎き故を付たり手を知るとは何房子
ゆくりトハ雅言何ハ手を結ぶと知りしを
手を付るハあくのちくあるハいちしき兄ぐと歟
の趣向ともあさてぬ笑ひ拙し

■　何ぞやらて手の届かぬ又是ておる

▲前句手さくるとは十番会て何房するる人ト云
云ふ由を付たり何ぞやらて手の届かぬ又是ておる
ト八雅き時ハ人並の志なりしをそちハよきぬ始
に居たるおあり知らして知られ猪に
と上もの身ともか生涯嫁ほや若き者との
ならりおにおる様くかる人ハ少しもあり

□　まみえるけに恋する寸歎　　　人

▲前句手ねんておるに恋する体ト云ふ□更歎を
付たりまみえるけに恋する寸歎ト八契る人に
ならぬ思とて若に夜ねる様之○此付ぬ君
に契れて実地に存くり某手前ハ白を中さて
いるとおに見る恥ら白を借てもハ皆契情とおれ
と意の隋を実に尊し存て様くめくり［十記］
実の先後を知る所ハ家のあくかる時ハ又法あり
此おるに恋を見て是を生むるのおト
云ふ□様報役て味方散乱□化敗て本の毀
阿保ト、不成就後のおるにゐる時ハ情ハ後悔

と変て世の風俗とあひコハ虚実の虚実に返ら

■ 大哲の人は法華をたのまれて　人

▲あるときこれて法腰すあをきを供の腰なト

又たとえ[illegible]おとをたく大哲の人は法むをたい

あるされてよ[illegible]ちを[illegible]なて知の字[illegible]なる和の

いるを世を[illegible]て法むを性七を以ちの[illegible]法て

法ひろ仏をあるあ[illegible]郷の[illegible]伝[illegible]と[illegible]ひ

は[illegible]を分[illegible]を[illegible]て法出るいをしきを

伝云のるの[illegible]体あり

■ 月の夕方[illegible]約縄ろ、　下

▲あるて字大哲は法むをあきれ[illegible]おする

体と又たに人集る用をたう月の夕へは約縄

ろ[illegible]金仏ちあひ[illegible]あの[illegible]

体は来る中は二人法むの来るを[illegible]ちれ

と[illegible]も人[illegible]おある[illegible]宗[illegible]の[illegible]

を[illegible]あ[illegible]廉とあひ[illegible]大哲[illegible]て集う

と文[illegible]を[illegible]るあ[illegible]の[illegible]あき[illegible]の[illegible]

さる[illegible]い[illegible]氏[illegible]用の[illegible]と[illegible]分[illegible]

□ [illegible]も[illegible]ふ[illegible]を[illegible]

▲あるの月の夕へ[illegible]月[illegible]あ[illegible]約縄の下[illegible]

る体と又たまを[illegible]の[illegible]を[illegible]ふ

[illegible]も[illegible]と[illegible]木棟[illegible]大[illegible]を[illegible]

つ[illegible]と[illegible]を[illegible]と[illegible]食

又て[illegible]を[illegible]に[illegible]と[illegible]を[illegible]

[illegible]の[illegible]と[illegible]食[illegible]の[illegible]

○ 杖の[illegible]き乃畑又る客　人

▲あるの試る[illegible]て[illegible]食[illegible]体と又たを客の

[illegible]を[illegible]を[illegible]を[illegible]

[illegible]食[illegible]客と[illegible]コハ[illegible]時[illegible]

と又たを□杖の[illegible]きも又[illegible]西[illegible]乃中

する人の梨[illegible]の[illegible]を[illegible]

を思[illegible]あ[illegible]蓋[illegible]人[illegible]自他を[illegible]

□　我伝ていろうし世を背くべき　人
▲おなじ相又る客ちう故あて生ぶ死する人之五
又人根の推を分ちう我伝ていろうし世を
ヤ（キウヤカ）へきとハ後生の推を居ヤ人のむ再
新る生命只後世三昧の志あれとも支之教
みうれい生の通ていろうし世を守れもて病の
の推を居る推へ氏へきハ推云次い伝信の彼へ
□　孫ゆ〳〵ヤくう文字ゆうむ戸　下
▲おなじ我伝て世を青人を又て我もいろうくと発
む伝ていろ五又人の引推を分ちう孫ゆ〳〵ヤくう
文字ゆうむ戸ハ蜀山の推者のてき彩て文字
の戸て使てあるを又て生て孫ゆ〳〵ヤ〳〵ゆ
むかる使鬼てゆ〳〵面白うむと又ていろ忘の
ゆる推へ〈ゆうて彼へるいよ〳〵
■　老化の哭て怪ゆる使おつ　、
▲おなじ病中の一生て孫ゆ〳〵出て戸て法ていて陽

件ていろ五又ゆ推を分ちう花の哭て怪ゆ〳〵ゆる
使おつハ代ゆ五ハ正十二の世捉ゆれい病ゆれと
枝ゆさむと一生て泳つる文字の郭を又て悪ゆ
一生ゆ五ゆ未快ゆ〳〵ゆめ世病て人の生ゆさて
とゆ五ゆれゆ　因正月ゆう六月を生て去い
去花の哭七月ゆう独月を生て人い秋哭
の哭を行て行ゆ　○国仲又我子の孝妻九ゆ
を切て多田内件の子美文九の分代とゆを更
文九の正十哭て仲又ゆ出の怪使ハ百ゆ怪へ
■　去ゆ乃祖の伝き妻ゆ世　人
▲おなじ花の哭のめてきて怪ゆ〳〵怪使ゆ件ていろ五
使越て推を分ちう去ゆの祖の伝き妻の日ハ出入
の祖母の使伝去て序て列り勿き附ちう育一
子又二歌の正妻て新ゆ妻て信出使越むと
祖伝き神て行れ月出すて病ゆる推へ〇風
字安寺去の日ハ七ハ死後ちうむ

□ お殿様の御の宮家の内子 人
ある日去日寺さま祈祷でお殿様の御内子
又用を分けてお殿様の宮家の内子
祈祷をする時御女の長日の修法をする人
位高く衣裳装束むを御の宮家の内子
まい祈祷とも多くあるおくりとも奇怪
合て酒家ゆ祈く○再返 久ゝと祈くう
□ 内へまゐりて狂吠る 犬 下
ある日お殿様寺又別ぬ猿人の御又おゝ又
文を能てゐるを分くう内へまゐりてあばり吠
る犬ゝ人あの御大の門ゆ殺る人を吠て在
おれあゝ何ゆ家へ入て狂吠ちる犬
● 旅殿の水の流きはあれや 、
ある日内へまゐる人の長長て吠る御内子
お欣ゆ寄る猿を分くう〈又吠る者人を
分くゝ自他ゆ立て吠る後あゝ家へ狂吠る内ゆ 福

考あゆ立人を殺し記す御内子 今音お殿 猫犬の
立人を助へあるをもセ□うそでみの口を作る何
の工ゝ六何の外て吠て目見ぬあゝ何の内へ
入て狂吠て記す猿あゝ吠人大ゆかゝむ
■ 長静なる高の屋出し 人
ある旅さあ寺猿を知て知お欣ゆ出る御内子
猿汗さまゝ猿を分くう長静なる高の屋出ゝ
殺さあ水ゆ引きはだやゝと天ゝ猿を知て高を
隆セ引ゆ長ゝ知んとお長てめゝ猿
□ 寄合獨活猿を乗ゝ 、
ある日高寄三猿出ゝ天 長静なる高の屋出ゝ
立人まゝ猿を分くう寄合獨活猿を乗ゝ
ゝ旅昭家芸ゝ知セ逆ゝ高の屋出ゝ猿
去りしと行化て門ゆ出ゝ人走て
あれゆゝ人高ゝワト字石俣て笑ゝ知ゝ猿
大宗 井性おた食ゝ家寄合の時旅昭ゝ聖ゝて

独活を拾ひ寂莫い徒そもけ〻あるいきうひ
ゝ乃中の女房侍の独活徒そこと号ゝ乃
■ 又献ち乃ゝ侍るちしゝ　下
▲ある歌合の独活徒そ又歌ゝ時うゝ仲と左
持ち奏を付ゝゝ又献ち乃ゝ侍るゝゝと徒ゝ
和の汝て如む遠ゝゝて侍ゝ歌ゝて
ゝ国ゝと侍ゝ拾ゝ○天本歌詠呈拾遺古歌を
ゝ拾イ二入不用ゝ出を及ゝゝ歌と云ゝ遠ゝ
歌ゝ雑冊ゝゝ侍ゝ侍ゝゝ表ゝ歌ゝあゝ
を又侍ゝゝゝと云て出ぬ又寄侍ゝ侍
ゝ除和の献ちゝゝ付句ゝ歌す尻拾遺
■ 打毬の油ゝ　押　侍　、
▲ある再ち献ちの時候れぬ拾ゝ仲と左又
又ちゝを付ゝゝ打毬の油ゝて押侍ハ拾仕
向献ちい好ゝゝ付ゝ侍仕ゝを又侍ゝ
ゝて仕ゝる拾遺油ゝあゝれいゝゝむと南

或ゝ侍ゝ夏ゝ侍て仕ゝする南ゝき拾
■ 臼を乾せ　人
▲ある打拾ゝて乾ゝ侍ゝゝ侍ゝる仲と左
乾ゝ侍ゝ拾ゝ付ゝゝ和ゝ侍ゝ侍ゝ
和の拾の打毬ゝ又ゝ接ゝ撞臼ゝ侍
ゝ乾ちむと乾を延て拾むゝて臼の乃
ゝ乾ゝを侍ゝ人ゝ侍て独ゝゝ辛ゝし臼を
乾れゝ又ゝゝ拾ゝ白菊のゝゝと歌ゝ乾
付ゝゝゝヤアと再ゝ拾ゝ拾
○ ふく風ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝふゝと　、
▲ある歌合ゝ付ゝある酒の臼と左又侍のあを
侍ゝゝ長拾ゝのゝて侍ゝ寂ゝ侍ゝ石の
臼を乾す仲と左□今奏ゝ風旅の乗ゝ乃侍
穴ゝゝハいとをゝゝゝむ
● 羊ゝ去ハゝて風山乃秋　下
▲あゝ拾子仲ゝ荒廃地と左ゝ古ちあ侍ゝ付ゝ

△立てる風と付合なり実い物子叫動て居き
養平と文点□おのめの角要ふ仙世と秋風
のふくと付て芳今の哀を叙する孤あむ

■ むつぐと月又る数の叙に似て　下

△ある人まいさ寺守冠を築こる屋と文点文字を
解る拾を付さうむつぐと月又る点の叙に似て
と叙の冠を屋を月又る拾を宮の又て新容
本を払ひ快と月又る拾を宮の又て新容
い叙に似てるお母い栗くもと名孫の祖
付く○天日本花拾古帝花百海さう西方
関白の名末イ南屋さ須仏及長橋の形を屋く
路子の巧と芝者広品と号たり文子の代光
む冠山も冠ゑむ点絵て扉に付合之

□ 人乃文ヨ丸ろ丸ろ丸ろ　人

△ある むつぐ〜る旅ふも叙に似て正面に文
点始まるき拾を付さう人の文ふたろ丸ろ

と人文ふ丸ろ丸ろ叙の遠
云ち結る石部合吉の点子之丸の夏に芳
ふ丸と人のさてさする拾をう

■ 旅〜〜丸や苴やを荷込　下

△ある人文れむを入て何程れる芝ふ
と文点れるゆ拾を付さう旅く丸や苴やを
荷込ニテモト人村屯の宅ふ〜じい程丸や芋苞
おりる入仏ふ文ふを古すまる人の諺
りと旅お入て時する拾く○天日丸や部ト拾さう
内苴ト文も非之天ノ苴七周切麻くる周切苞
苴之片実い苞ふ〜て白気通寺

■ おもる寺のさろく町中　人

△ある旅く丸苞ふを文ふ家込い件に文点文字
付ふふを付さうおもる寺のさろく町中ト要
の古用干ちる不を市出荷の点寺通く
ふて り南て結す拾く

□ おろ〳〵と小法の宿の豆吋分　下

▲ある千畳をあそこえむとて熱す仏と鉄
夕方を分てうおろ〳〵とさむろの宿の豆吋分
ト畳千て畳庫ヒ比雷声れたくめきろ
強き庫恐ヒ出て畳入る人の皆振恐て
乃木伝ヒする拾〳〵おろ〳〵ハカフロレ　ヨドロ〳〵
あとうヒ〳〵〳〵ろんじさるをさむろト引をる
いる拍子〳〵因或ヒ七条回ヒ〳〵夕方て寄おろ
おろと心くるる柳平の河原辺の辺てえい小法の
惟下い伝ヒ拾遺分ヒ三ヒ畳ヒ片り

□ 皆回ヒ〳〵ヒ　念仏　人

因ある小法の宿て畳庫ヒ人の寄皆仏と又
ヒ畳ヒ方ヒ条を分て皆回ヒ中す念仏ハ
必き吋の神教と一ヒ人念仏する拾ヒ片り

■ 百万も粗　亮よ　花の中　下

因ある皆回ヒ皆さる陸源ヒの大念仏ト又ヒ畳

掃の親ヒ方ヒ〳〵百万も拾あるヒむの去ト昔
百万の一子を見て拾ヒ皆ヒ畳ヒ仏孫を
見合て余仏ヒ畳のむの去を親ヒ拾ヒ女我
ヒ地名おれいさらを居一百万をヒて大念仏を殿
ヒたり片▲百万ハ南都春日の祝子ヒ失ヒおて
陸ヒを人矢て拾ヒとあり世賢を乱一古ヒ
布を被て見さまひさ秋世界の念仏ヒ
手ヒ我子ヒ畳ヒやヒむと拾一法華の義を
あり名れハ又和ヒ集ヒ畳ヒて畳ヒ子我子ヒ
見あひて畳庫ヒ〳〵〳〵承ヒ畳ヒ承ヒ拾ヒ
い拾止ヒ〳〵ヒ矢て休ヒ〳〵ヒ〳〵ヒ矢ヒ八幡寺
よヒよヒ吋ハ人皆の回ヒ〳〵念仏ヒ拾ヒ百
万も寄ヒ拾て子ヒ畳ヒ人〳〵ヒんヒあり又やヒ吋
いヒ万も拾ヒ和ヒれハ人皆念仏ヒんヒあり
□ 田ヒ朱きれて楊ヒ〳〵き　人

▲ある百万ヒ百万人も拾ヒ畳ヒ花ヒ和ヒ又ヒ

夫ゝ能ゝの手ゝ分ゝり田ゝ植ゝえて稲ゝ刈ゝきゝハ白
き紙ゝ帋ゝの二ゝ折ゝ重ゝ屋ゝも有ゝ拍ゝ子ゝ竹ゝ木ゝ
やゝ和ゝ尚ゝ末ゝ之ゝ田ゝ植ゝ歌ゝ植ゝえゝる人ゝ仏ゝと和ゝ
かゝる拍ゝ子ゝ〇此ゝ之ゝ歌ゝ悪ゝ者ゝ世ゝ事ゝ仏ゝの三
老ゝ集ゝ中ゝ之ゝ搆ゝり

保川の夜

丁ゝ寺ゝも鐘ゝ撞ゝき月ゝの酷ゝさゝや　我ゝ人

内ひゝそゝ〻る我ゝ人ゝを月ゝの足ゝ音ゝ〻ゝ〻ゝと聞ゝ
ゆゝふゝにゝも伝ゝ和ゝき〻く叶ゝふゝ者ゝ哉ゝ枕ゝとん
此ゝて鄰ゝ之ゝ方ゝ之ゝ者ゝ和ゝ〻ゝ〻ゝと鳴ゝき声ゝとゝ〻ゝ
○再拔　〻ゝひゝきゝやゝ清ゝ〻ゝ

■　伊ゝ吉ゝひゝ和ゝふ無ゝ之ゝ月ゝ　義

▲ゝ有ゝも字ゝ丁ゝも鄰ゝ之ゝ月ゝ嘆ゝやゝ在ゝ之ゝ和ゝと
又ゝ点ゝ夜ゝ嘆ゝきゝ者ゝを分ゝり伊ゝ伊ゝ和ゝ之ゝ比ゝの月ゝ人
彼ゝ方ゝ之ゝ月ゝ数ゝ至ゝ相ゝと彼ゝ合ゝ彼ゝ方ゝ之ゝ者ゝ

て伊ゝ之ゝ方ゝ之ゝ伊ゝ和ゝ仲ゝ之ゝ中ゝ之ゝ一ゝ人ゝ十ゝ戸ゝの風ゝ客ゝ
あゝ毎ゝ夜ゝの伊ゝ合ゝ之ゝ他ゝ独ゝ孤ゝ月ゝ之ゝ嘆ゝ和ゝ
丁ゝ寺ゝ〇寺ゝて風ゝ体ゝの一ゝ句ゝ之ゝ此ゝ手ゝ和ゝ〇サ桑主
客ゝ自ゝ分ゝの遠ゝ村ゝに内ゝ伊ゝ和ゝ之ゝ比ゝ京ゝ和ゝ之ゝ向ゝ和ゝ
れゝ仲ゝ秋ゝ十ゝ五ゝの月ゝも相ゝ象ゝ伊ゝ和ゝ之ゝ者ゝ古
ゝしゝやゝ之ゝ之ゝ分ゝれゝも中ゝ寺

□　為ゝ搆ゝ誰ゝ之ゝ家ゝ屋ゝ重ゝ重ゝ月ゝ

▲ゝ有ゝ伊ゝ伊ゝ和ゝ之ゝ比ゝの月ゝナ人ゝに西ゝ京ゝ人ゝ比ゝ共
彼ゝの夫ゝ之ゝ分ゝり為ゝ搆ゝ誰ゝ家ゝ屋ゝ重ゝ重ゝ
むゝハ床ゝ之ゝ居ゝる花ゝを人ゝて草ゝの名ゝ之ゝ搆ゝと
完ゝ屋ゝ之ゝの分ゝ人ゝ有ゝむゝ美ゝ比ゝ伊ゝ和ゝ合ゝ連ゝ中ゝ
ゝの程ゝ仲ゝも号ゝ和ゝと和ゝ字ゝ拍ゝ〇時ゝ之ゝ者ゝ
搆ゝいゝく完ゝ屋ゝ有ゝ之ゝ者ゝ自ゝ由ゝ有ゝ和ゝを相ゝ彼ゝ美ゝ夫
ゝて作ゝる者ゝ之ゝ者ゝ比ゝ詩ゝ之ゝ

相ゝ生ゝ和ゝ之ゝ秋ゝの夕ゝ寺ゝ　人

▲ゝ有ゝ彼ゝ完ゝ屋ゝ之ゝ者ゝ比ゝ和ゝ之ゝ相ゝ人ゝの内ゝ人ゝ比ゝ

又佐を付さう〳〵又左を出て作り云ふ所の名
きい陸奥の国[illegible]れ離て庭の夕まるとも毎
年会釈なく陸奥の人い金庭を考へむ金仲
宮い宮殿あり名の草まみてかくいたと
又ちに[illegible]桜子の名も高くまの地蔵とも人い
草をめつて桜子に[illegible]草に[illegible]草に付て[illegible]
子も高くでハんと紀伊せむコレ宮殿の桜子
□ 新屋の大きさ五尺ばかり
▲あるの庭を新する皆 陸奥に大なるおを人を
向と又左に又おを付さう新さんの大きさ五尺
ばかりおりとハ新形の張りて秋のりの葉ま
きはさえてさ〳〵大さ育さおと作山さう
桜く 歴 魏王貽我大瓠之種我樹之
成而実五石以盛水漿之瓠ノ
実あるいはる新庭おむを称会○庭園陸奥
の人を園荘と云て五石の新と行さう桜葉

荘子のあるの中新さ作る俳諧さ伊の作
ても高度今月のあ桜さあきるい作る
■ 風ニ吹れて帰る市人 義
▲あるの五石ばかりちやと唱する大新の作おと又左
又お人を付さう風吹れて帰る市人と柔市は
桜さう大新の作る大園庭のときさ風さ新を
又あきれ帰る人を又て夕新形の下涼おそ風
さ吹れて帰るワイと伴する桜○園 大新空市
の黄おと一瓶之夫さ風さ寸大巣又今木
さをする新を風のあ寸作に桜葉もまさ云て
五石も市人も少さ寸
■ 何ぞもも安い是名利の地
▲あるの寸き神ノ風さ吹れて帰る市人と又左風ちの
元貨を付さう作る中も安い是名利の地ハ
或い往市さ乃桜を云て是名新さ陸地
ちし或い要さ秋さ或作ま と八仙のり或千

金の空家を為あるとて居る名利の風を名
やる振をう一因也安古東名利地空手
毋金行路難に付くとあり片
○ 医乃多きを見る初れ 人
▲ある名利の人を待ち件と云医者の序を付
う人に目おと作為衆に侍るとめられと
実ニ名利の人い分め先ず廉ニみる為れ
て実い地字を廉林ニ云ち□に戸に云ニ頁め茄
に云ニ頁と云ち梅津辺の畑のうきまて出安の
名利に河と実ニうちすあく○番ヲ医者
の多きを怪しう

■ 忙しと病人の空ニ立ちて 前

▲ある仮初やに三医の多きを目おれに何と云
云合の人を付うこハ出入医多き富家ハ 人
い和代ハ多の奥様のやうを気引を大
勢の医を呼ん店の主人を[illegible]めうを主する金伴町

人の妻ニハ人に遠ハ内き病人をあれ風位
い怪しを初ニ子と独ぎちつて夫用閑ニ出ハ
家の要木作ハ○[illegible]已も医と引ニ
すうハ医の多きを目おく件と云出る振ハ
人遠ハ陳ハうと病人の空ニ立出てあれ医者の
医多きを目おに自白ハ

□ 独セ話やハきを乃沢取 人

▲ある他に力忙しと病人の空ニ立出ては何人
ニ夫用と怪う独セをやハちの沢に云ハちの
陽位ハ家内の忙き用い便位ハとれ合ぶち
の子ハ沢振ハと天宝ハ人後位のセを
やをとんあ母と出て位ハて怪る振ハ

■ 代ニ古き玄番の名を伝ハ 前

▲ある独セをやに代ハ代ちの宛長公旦那と云ニ
夫人を付うハ代ニ古き玄番の名を伝ハ
代ハ玄番を名のるハ主ハハハ家

より走たりちまれ度位氏人のんまあはし
足弱もそめぬ面乃曝 人
▲おの古き玄者ハ中世ニ久き柄の家ト又左ハ其
威勢を分ち足弱もそめぬ面の曝ハ村氏
の恐怖て敬ハ拙を玄者ようもそめ拙ニ
玄地ある人のさ子口する拙ニ○(右手村)文約文者日
「式村」ニ古き玄者の名を伝「木殿もそめぬ面の
夕者とハ名の曝あ千や義日恐ニ後諧
も伝ると拙て分るハ丘華也ハあれハ夕
ニ者ニ弟日を化拙てあの曝とハ名
す俗の拙を夕て「丁」ハり 曲者ハ村本り
夕者の遠ハ周記の矢あと氏日を拙ハ名
るんあハあど氏日ノハ日ノの分保を名さる名
弱ニ義ニ後て丘華也ハ寓云明服の人弱す
まきう差義後ニ遠と名あもそを又伝ニ
拙ニ者る べきう 或日弱拙を拙柄ニ又ハと

まれくまれ玄者ハ玄者ハ名ハ名ハおの日の
すや 者日拙す玄者ハ者人あれハ云れハ名
ま村也も足弱ぬくハ又人の為ハ但去の子
を分れハ拙する日あくとおの弱拙を累す
不ニを引ハあれハ中京の分ハ文者是を引ハと
分ハハ玄者大拙ハ悪人ハ立水ニ反ハ乾男
とする浮ハりの拙あむ俳祇ハ子せあれハ玄
者ニ柔弱の人あハとも又む除撰ニ変只
拙去の用ニ庭ニあ
[illegible] 夜ハやあまり茅ハ名ハてやハ
▲おの荒ハ面ニ足弱のもきハくき曝ハ又左ニ又
人を分ハきあハや余ハおハあてやハとハ
昭のお乃俄ハ乃拙ハる子弱安を玄ハ社
と名や拙ハ△おの准を新て面のもハもめ拙
ニ加てハがハ宮和の助辞又文ハ引ハく又
拙ハハん又又方のおを引ハ又て又ハ示ハ

かゝるゝ（ハカヨワリユウナリ）あてやらハ（ヤウニ）（キカタチ）と○（浮世）
及ばれぬやうなとゝを思て居る拍と又こゝろにハ
詩の内ノ連之字ハ人のれをぬるゆゑあるす

● 風引たる人の声の笑ー　人

▲おなじ架そくあてやらハ（ヤウニ）きつひと又拍子
をなくり風引弱ゝ声の笑ーとあゝセ行ひ
いも持ち交ゝ有るやとゝと哀ゝ○天保氏葵
はゝ上形松の伊ハ非ゝ加ゝつハ風邪まゝあゝた
加ゝき伊ゝ弱日衣ゝうおもゝそ手振れ
拍あれゝ声ともいまれあす

□ まもたゝ寺ゝの鐘の拍もすゝ　菊

▲おなじ風引の一ハ致内伝ゆの着庭する伊と又
吉ゝんをゝて拍をなくり手も分す立の拍
もすゝきぬとハ何を手もゝもゝすゝとん
ゝうそゝくゝまゝて拍く

○ お傳くさき舟流あゝんを　人

▲おなじ食すゝきぬ舟ゝとゝ又吉ゝ傳の咲をなくり
ゝ宿を舟ゝゝうゝるゝ寺拍　寄ハまもつ寺ハ伊
あゝ食寺と不寄伊と又吉ゝ和使のゝもくり
考れすとスルカ又ハ食と又吉ゝ民の歌をゝゝ
行会とスルカ口さと嗜と又ゝ彩花方数あむ

□ 月と老比良の言葉を比て　菊

▲おなじお傳咲きなり夜辺巳る拍手舟と又吉又坊
の無をなくり月とむ比ゝの言ねをかて比ゝ月
を手ゝむを西ゝ比良の言ゝを涉る拍人ゝむ

● 雪老さゝ比る比乃孔数　人

▲おなじかて比余句南（暖る伊と又吉）畑ゝの
拍をなくり（比句月むを分ゝ）寄ハかて
比拍子ゝの一口後ゝ弟ゝ向ゝ雑天ゝ六月
花ハ数老ゝ郭ゝ山の堡ゝ庭の畑の白ゝむ

● 彼ハゝ行ゝ行ゝ去乃末

▲おなじ孔数ハ畑ゝ当て仕事する伊と又吉又思を

行くう彼戸に行お行る去の来ハ日永乃
社の小道伝く古行に神別袖別衣むと孔扱て腰
に巻てる姿姫来取又の手人組と
□ 店さひき麦の抒別 翁
▲ある彼戸つるを田舎町ハ又五郎又家の話を
行くう店ハ寂き麦の換ワトハ店先に麦ひ
くを入てくきてあき伯父と思ってくるる
話く○浮世 豊家ハ目遠く
□ 家あくて服紗を色むき寺後 人
▲ある店ハ休しと客件又くるハ話て代家に来る使
トハ又五郎物の話を行くう家あくて服紗を色む
寺後ハ代家の娘の化粧伝て小服紗を
後押色風の姿ハの去常着伝る生代の
正に来る男の子と店先う納戸を
店命してあ話く
■ お見る神子乃おえ 翁

▲ある えう家あくて服紗を色む寺後の神
後ト 浮世 又五郎 梓神をみを行くうおとあるみ
子のお云トハ先後を立帯おて話目を南お
るうち医忘の行扱てるの国を生活ると医
く帯ハ伯父に孔神みお伯てお後を立く
す話て後に品性話る話て帯孔行行
後色納る話をお見あるおそと見る話
△ハ振出ここ又おある棒らうもあ行およ
そ孔て先るもあ行○浮世 極ているる行いい
ふるハあ行れと話けて成きるこハ自翁伯
ぬ移っているる行と定ぬ行あ人きや
■ 人去ていまこれ度の白りる 人
▲ある お見る お云旨 伯の人に話を話て体ト又五
神乗伯の話を行くう人去て来口度の白翁トハ
いるる君庭る伯ひに神乗ここの話をおてあく
人自セられて見の行も治ひ生て度の話を

に名残惜てんそろておもふにはきえんにて下句の
是にて全篇をおもふに序にとるをえてとるなく
[大]荀彧之居たる所三日の留香失す故に荀令香
と称せり此句は香おもふ人なるむなり○[小本]法定
手法・坐ト作れり

一　初瀬に籠る堂乃片隅　翁

▲ある者をかを清め居たる観音の人ト見立
文様の句を付たり初瀬にこもる堂の片隅ハやを
なき人の寒て参籠して夜祝く侍し人の病ある
を見ていかなる故の人にやと思ひやる句也△残ハ哀に
て乗らとみるおもふさき家に秀に祈祷の清き起
して哀を破りたり旬は初瀬おも似されと崖大に
違へり○[評注]源氏の侍は源之玉鬘右近の
時ならに遇ふる古さるなんなり

■　時ならぬ鼠のあるゝ宮中　人

▲ある片隅のうちに通夜せる侍に逢夜に起る
ぬを付たり時ならぬ鼠のあるゝハ宮中にて天井鼠
のあれに通夜の眠覚ておどろき見ゆる時なら
ぬ秀寺くろと言信する中に逢信人の心を
うつす句也○[三本]あるゝ・ト作れり

■　垣穂乃さゝげ露ハこぼれて　翁

▲ある其鼠の荒ある此時ならぬ侍ト見立貞徳
の句を付たり垣ほのさゝげ露ハこぼれてとハ畠
の垣に其鼠のさゝげ喰ふ時ならぬ時節を出す
人有て秋ある時露も哀に振し△穂とハおの乃
秀ゝさいふ宿家ハ垣折の末の抽る枝也
○[評注]鼠のあるゝ宮家に時なもなくらむ垣の
さゝげも露おくらむと此ハ推察之

□　あやまくに旅ふ蛛夕眺　人

▲ある其露ハこぼれて此夕方後涼き侍ト見立蝸
居の句を付たりあやまくに旅ふ蛛夕眺ト八
夜病みむちと此方へと誘れ垣を眺てあく

原ひ風情を両様の人にて不絶病人多る子と
とんを痛る拵へ○評注あやうくいとしき姿
天ヨクのんを非と又次の侯と二白死の窓
病人宣さんるい死おもに拵系之コハ宣さ又あ
ゝるいわ氏系情コ拵さ又る拵あるそ

■ 石の雲ゝを作ら侯色むせ　義

▲あ白意ゝ拵ゝ妹ゝ夕脆の拵情を表て酔る侍ト
人ち又侯の歴句を分ゝあの雲ゝ作侯
色むそハ宣コ拵ゝて白きの雪ゝを拵さて
ゝ雲ゝ雨といれむ者もかやあのそハたゝ
君と忘の侯そとおそそて見ゝゝ意病
ゝ妹ゝん雪ゝ妹き酔云ゝむ○評注妹ゝん
きなゝ氏ハ人達ゝ妹ゝ氏ハ作ゝ氏ハ他人の句そ

■ せく月の上死宣コて消さゝに　人

▲あ白雲ゝ月ヲステあの色い作侯色むそ氏
句ゝ又ゝ氏ゝ白き意さ分ゝ白く月のうちの宣

ゝそ侯さゝゝコハ評注多貞 翁五条ある拵名の外ゝ
赤コ夕表君ゝ方連てあゝを原氏語ゝい拵
ひ代ゝゝゝ色き不ゝん安くて明さむと八月
十五夜の明方俄コ生きのセ出ゝくさゝゝ
月コ西ゝゝ行くあゝゝれむゝ生ハ氏休ひ
とくのゝ拵俄コ雲ゝ座て明白く宣の雲明く
雪ゝ色ゝを色き白赤ゝ色の故良コ拵ゝ
夕貞 山のセ乃ゝ白ゝ乃ゝて白く月ゝ上の宣ゝて新
や拵ゝむトん和くあ拵ゝりさゝゝ只ゝゝる
逝く果て次ゝゝの校ゝ白系ゝ月雪ゝの生美
出て侯ゝ苦ゝめ夕表を氏教ゝる氏の表ゝ

■ 石ゝ雪ゝく新ゝ梅ゝ居眠り　義

▲あ白白く月雪乃中の侍ト人ゝ陸ゝ生の拵人を
ゝ侯ゝ石ゝ白ゝ雪く梅コ居眠ゝ人氏雪拵ゝる
往来を宣ゝて居眠白く拵ゝ白ゝ梅て拵
夏月雪一雪の梅 歳 義の心を見合てゝ

○大夕ゑ[illegible]

□ 秋の田をかりそめ[illegible]　人

▲おもゝ佑も幸く字平安能ゑ[illegible]

□ [illegible]

▲[illegible]

□ いろあく尾庭乃木葉尾　人

▲[illegible]

■ 能之する子乃痩てかしぬき　翁

▲[illegible]

と又て本ゞ之子ハ之の付ある本茅やの肩板
ゝ眩暈病を又出ゝる宣接の工夫こ

■ 花の比俳交集も蕊一　人

▲おもかしき事かゝうまきを見ふ秋の時と又也
文こ秋てゐるを分ゝう花の比俳交集も蕊一
ハ猿友達の彼者集さとてあ云て通ゝきゝ人
て出ゝもまあゝ云陽せて手をむ和をと
毋歌の彩ゝ拓十七八の姫と又て見渡こやと衰
ゝ〳〵庵を乞ゝ多ふ時似れ人金歌ゝお主所の主
時ゝこ和きゝ白と分保口ゝ和と彼ゝおゝ病
の云ゝきゝ有こ歌時ゝ

□ 田閑を給て手ゝきゝ口　義

▲おもの報俳こ俳交集も蕊一ハ村と又也欣仲
又の化口年ゝ田こを分て手ゝきゝ口ト
ハ俳交集の人こ対て我ゝ分ゝ田閑を給て
口を汚ゝ年ゝ各と達て俳交集て極乗集

ゝむ和を猿金ゝ中云りゝ田欣ゝ俳を
歌をゝ〳〵ゝ拓ゝ〳〵ゝ三白の阮時を蕊一ゝ氏
芭ゝ生来ゝ〳〵ゝ猿人ゝ対換ゝ者ゝ集
中て生二ゝ有ゝ猿金ゝ

義こ使て来ゝ人の孫ゝきゝ

▲義ゝ云ゝ義ゝ云ゝ文や天使ゝ　貝角
生ゝ云ゝ古こゝ有ゝ生ゝ云ゝ文ゝ天使ゝ文こ毛乃
ゝ猿ゝ生ゝ人こ和こ生ゝ和こ毋ゝ文を持け
お主こ猿人ゝ有ゝ宴こ義ゝ云ゝ有ゝ
振去の久を云ゝ〳〵ゝ集の振振こ也ゝ
も晋子を也て主ゝ方一ゝ也

□ 三枝さの月又毋ゝ猿人
▲本白高ゝ出余白貝欣ゝ俳又ゝ〳〵ゝ仲又
主二の欣ゝ俳ゝ拓ゝ分ゝ三枝さの月又毋

ありけりとハ行月名月教主の法華ニ入ツ
ら空の广を足袋ら捨る指て赤色の武士の月
出船の句をなくりコレ生の指指く

■ 菓子秋の座ニ菓を引指て　人

▲おなじ菓子ありけり多ク出ル仕合ニ来ル河ト足
立ハ三月又の設セ一指を付ケ菓子秋の座ニ
菓を引指てハ座敷低くて月の眺仕ル一
と座上ニ菓一茶屋の並ぶ見ル指く　角

□ のまで云ハ一茶い所ニあり

▲おなじ菓又の座ニ菓を出て下ニ座ト仕ト又
立ハ秋次の指を付ケりのまで云ハ一茶い所ニあり
トハ菓肥入ル風時く○裏 飲でハ茶ハく
ト云ケり

□ 雑ら来て指ニ座ニ座る夜夜

▲おなじ雑雑ハ茶を出ル一指寿て云ハ仕ト金
傷店の指を付ケり雑来て指ニ座ニ座る夜夜ト

雑て涼き座ニ指れセ一を投やくもむ森次やセもむ
とお表ハ表を森ニ座ル茶ハまの手でおハ一
と咽ハて知る指く○裏 座ト唯ト指ケり

■ 歯き一四 人
▲おなじ森タル人ニ入テ雑来て指ニ座ニ座る夜夜ハ
河ニ入ニ又森寿を付ケ歯きりのうち陸の
ケ○トハ板橋の出ル入代て狂ハ指ル陸附
母の目ニ入て四の森ニ人を知る指く○さく
河ニ出ル座ニ出ル入ハのうち座ケ

■ 恨ケる涼ま止ケ三 止ケ三

▲おなじ六合の歯ケ三 板を明ル体ト金ニ意情
を付ケり恨ケる涼ま止て止ハ口汲ま付
て出ケ三森ケる陸黒ケ三の表ニ移て板打
又ケ三涼合て恨ケる指ケ今の化人も又雑
ケ○て人をケ三又厨る指又西

□ 雑ハ出ル入ケ三箱を寸ケる　角

▲黄白服する候きゝて止てゐる件と人を貴用
を付て辞退せゝ翁をすゝめ[東遊]紀辞美
狂言おて那人の名を書狂の傍捕て陳舎を医
れ那美狂のあを同じ名ゝと言れと
乃ゝめるあゝ面れて那美始を治のゝ
故ゝ翁をあを面の翁を又ゝと数ゝ辞とめ再
三辞すれゝも止るゝを見られ衝立てゝ祐
狂ゝ教を左ゝ相拍子をおて左づや考ゝ
のを老イ又ゝ昔を今ゝ考ゝもゝか
ゝの山水の面ゝ合て今ゝ人の狂を
高きゝ如ゝれゝ庶人皆候を陪ゝ那
いゝを成ゝ我を頑ゝて乱人を考ゝ傍き
物の切狂ゝ如ゝ成ゝを改ゝ衝止ゝ
の逆付ゝ宴ゝ服の角を付ゝ狂ゝ成ゝ
ゝ考ゝ用を付ゝ成ゝ

■ 空怪の蜘蛛の焼乃恐しき　角

▲翁白辞カ狂角ヲ人テ能カ辞ヒ翁ヲ翁をすゝ
ゝト怪ム体ニ人ヲ恐病ニ成ゝ病ニ成ゝ人
ゝる人も多き国中ニ病人翁を人て見て
ゝ美狂ニおて度ゝ考ゝとて狂ゝふゝ
ゝゝあるゝゝを信ゝ教の教様ゝ悪ゝ教の狂
ゝゝあゝ世ゝ彩の病ゝとゝおゝて一方二件の医
を考ゝゝ是正ゝ皮彩の翁を逆ゝあゝ
むゝア世ゝの病ゝと狂ゝ狂ゝ人ゝ彩の
我彩の方を考ゝも辞の方を考ゝも辞
あゝれて変化狂ゝ又美狂ゝ翁ゝ考ゝ
会教ゝて面白ゝあゝ昔斤見ゝ狂君狂て死
狂ゝあゝゝゝを辞ニ寓て記ゝ辞狂君
あゝ千ゝ代寓ゝ治あゝ宣陵の姿ゝ狂
あゝ病ゝイ解離魂俗ニ云カデ病ゝ奇疾方ゝ
人臥氏ハ刃ノ外三刃アルヿヲ定ニ指テ別
ナリ但治ウサルゝ蓋人臥氏ハ心肝ニ病入ル

モノヽ此肝を三ヨツテ邪ヲノヒテ祝舎ニ
陥サル故ヽ辰砂人参茯神ヲ煎服スル
ヒハ真ナモノヽ爽ニ仮ナモノ自化スヒリ
○國枝イタキの上略タヅキとよむヒハ和語の係
きまり無ク イタヽ・イタヽミ・イタハリ・イタイケ・
イタツキの類イヒ形容詞係きイヒ美なるなく
□ 隆ありくる金二万両 人
▲おなじ家の病の必拒ヒお人ちを祈ヒ内と又ヒ
其費を付くる後ありくる金二万両ハ国
ヒる大分第も人参代ヒ果て霊祐の抜苑ら
ヒ又多ヒ宣性ヒ成クヒ此のをめけやと
ほそ子を拾ヒ家ヒ病の時きを果て おも
廊ヒ ひとをく 拾ヒ
□ いとおしきを子を他人ヒ号ク
▲おなじ度目ハクヒる金二万両ヒ白と又ヒ
おなき拾ヒ付くひとおしきを子を他人と号ク

ハ国近世キ人伝 京宮町ヒ宗甫ヒふ人ありニ人
の男子の拾を又作動者ヒて分節を表ス代
ヒ一二万両の金ヒて生涯矣実人を救ヒ
○とゞ号ヒ作ヒ子を他人と号ク
リハ改て お後ヒ
□ やけと歩て又ヒ 三ノ十九 作ヒきを子 廿三 年
▲おなじ中ニテいとおしきを子を他人と号ク
と又ヒ其内を又後悔する情を述ヒ 無隆 楚
ヒ孝人ありて母の病をやき更衆を自祈
クヒ其母ヒ出されて白されい我子ヒあ子とヤ
ける なヒ其難ありし ヒリ やけと歩くのちの
ちさヒハ あの時他人といまとも云振ヒ
を他人と云ヒ なヒ役人ヒ対て今文子と云
て後目も涙れすいヒセひ 悔ヒる 意忠の
上の為ヒ ひ人ヒ故ヒ ヒ二度迄入ヒ 活ヒ
○又ヒ つきヒ 内院ヒ子 歩ヒ のちの

ちくさこと改て云ふ

□ 因 [サメテ] くさく [チヨセ] 卒こ行こるさめ云　角

▲ある女性こ殺人罪あてをやけと云て後ちくる仲と云中迄の呼を付う因さあて再を云ふるさあ云ハ苔きられむの暗礼淫もやけるのこう正礼とあり云ハ物の由くてよ一あきるやこ底付こう情愛七こと却作つ必抱されい彼方もん恋てえの母こるる拾く○因きく卒こ行こるにテハ女の恨る拾こ少形あられい因さあて卒こ孕をこ色こるト伝トレ云ふる時い後ろの他こう云る変こるよ

■ 奥を○ちくあ月の江乃母　人

▲ある云さあ云するい拾と伝方ようきく仲と云迄拾糸舟通る拾を付こう奥をつあ月の江の舟ハ奥つる麻の舟こう奥を月を云ふ只欠て呼く伝人を何乃拾

■ 保色孔不二ハ陸英こ秋の雲　、

▲ある奥つあ月糸脇空の舟ト云ち迄乃糸付こう保色の不二ハ陸英こ杖の雲ト云保陸云保辺の人行こ保つる舟と不二の糸を一自こ云席ゆく舟拾の雅宮く国ゆ英こ南いまく赤白西孔こ保色の山こと云拾保山の雲こと拾こう云り

■ 花とさーたる苔乃一瓶　角

▲ある保色の陸英の不二ハ孔を再ト云ち床の拾を付こう花とさーこる苔の一瓶ハ英糸の信花こる苔こ花乃苔ゆ孔こ花とハ文字も花こる苔こ花母苔ゆ孔こ花とハ文字も て正巻こ沿こう〈云ち作云も曲信こてよく拾こ孔こと信ゆき乃こ今拾こ糸の市人ハ試白の再弁ハ市保ち迄こ生こう

〔 陽炎を焼き袖こ包る

▲ある さーこる苔こ机上こ友苔の拾ちこる仲云

吉吉定の月又を行なう陽炎を焼き袖に包む
六机上の陽炎を入れて月を入る人の姿を袖法
て焼くむと表する物て焼くさを苦い袖
に包む今を分る余ぬ小古寺を見
今る風俗 同今時物 六月十六日十六家の男
女振袖を作る始振袖又母に乞を
いてき文を法袖を入て月人の座に出る家
に盛物る大陽炎を入れて中に穴を明て月を
入る是袖留の式 ○天焼さ紙ト作る
■ うき世一つ付て死ぬ人を換 人
▲おるゆンセキ子ノ陽炎を焼き袖に包む
る作ト又を又物の欲起を付る式三ツ
そ代表に陽炎打来セ 喪の方おの和の方
も夏の方に見て只先人の旅あるを喪い驚く陽
炎焼くて実らるを入れて付衰と中す
カ釈あき子とて生るも陽炎す成長すむ

只ふ使おるうき世の中に差して死一人乃
換のそとお惜む拾
□ 西豆毋東方朔も同ふ尺す
▲おるうき世号凡人鬼の中に死る夜の換い色
と世治る作ト又を又引云を分て西豆毋東方朔
も月ふ入寸ハ芳く仙人ら出生すと今
比生てみる仙人の一人も名只お立に生て居のひ
居ら後和と次桃喰て居のひよつけ 平安和語
西豆毋とハ一人も芳ふ出て今ハ東方朔と
竹一先も名をのこ守て月ふ入寸老ハ不定
の長ハ只石の大に美ますたとひ人出家とハ
七十八十を寸又中に分の盛あるを僧九余
多に法を頂く拾て おの虎情を隠く
■ よしや 弱弱の舌乃絶き 角
▲おる西方毋東方朔も月ふ入寸ト仙人吹ノ腰
ヨフレ作ト又を又人の点を求ろ よしやあく

むの古の袍きとハ唐紙の押画又て西之毋東方
形の仕出なるをアしハ画空之俳東方形う九
千年生あハ侯う二千年の今未せてきるべき
を何ゑ之ゑをるそと云ハて其次のかゝ紙のあ
む今拙之嫁む画を入てよんハ俳之袍きあ之むの
古ゑこ云訳しる横神彼ゑ結れすとハ義
し拙之コレ空接ゑて何の中之姿をちるハ白法之
○因ゑゑゑの身ハ孫うしく

□ あちきあや戸よれさまるく衣の裾　角

▲ある古の袍きゆゑゑゆゑゑゆゑハいもでおるく俳之空之
あふむう書ある姉の拙之身ゑうあちきあやゆゑきゑ
まるく衣の裾ハ口返課幸して左生る裾の戸ハ
むさまれるを古ハ袍くてゑをゑゆ裾ハ長く
てん殺るハ侯ゆ拙あきるゆあるゑと外拙ある
あふむ殺又て独ゑちるる拙之空又ゑ空ゑゑ
姿をちるる拙ゑ戸とゑそでんあふむの拙空之

らすちきあを対ちすてハ袍字云起す俳之
ハ二句難ふあるを要ゑまゑく拙ゑく

□ 意の釈ともあふ釈拙きむ　人

▲ある又てハゑ俳一裾を狭て内の人之戸を明
て拙英之体ト又左英句を分ゑく意の釈とも
あふ拙拙きむハ妹許ゆ思ゑ西之拙て出る忙さ
之裾を狭て拙れとゆ七とも口さと云て
元合されハ拙ちゆゑく拙むゑくと拙云する朋
半中のゑ拙く

■ 衛、忌ひ様もゑ様あすお改て　、

▲ある拙きむハ来空句多ゑられ人拙セむ
やあそて止むやと拙する体ト又左忌空ゑ俳を
述ゑうや忌様りゑれすお改てハる拙
備て通ゑゑく人目セられる中を忌拙て彼
人拙て要入ゑきやイやゑおゆゑハ字名ちむ
と様楽ゑ拙を空ゑゑて忌拙ゑ拙

□ 米はく　きるに陸之あり　角

▲おのれ偽はり衒ふ人は様々われすおみて考へ
体と足は様をるわきをなう米つく　きに陸之
りんとはすべてはなをめ守佛く　全設おきま
柄あれとも金広ふ候の用えするを我米の
行もあく偽成いとやせひまを用えかくやせひ
と日を異て合のをる木の工夫する拵へ

■ 夕粥病のたさ一拵のくろ　、

▲おのれ米つくあしきを足てなもや陸之あり
ムセく体と足は旅人の法を求さう夕粥病の
ちさよ拵のくろはあ毎くのを用えを足て
汐を為くえをあせ一筋町のたくて梅福の
病のをきさく拵のくろくろ拵へ

○ 歌りの笠を為ふ法　力　人

▲おのれ夕をるの乃ふ異て拵ちるは法る女達と足は
法力の先ゆく拵まけくう〳〵又旅人の拵ちるるは

拵へ一宮はに乃ま返て拵ちる体と足は三方
荒神下戸と足えうはは因の徒をても
うつぬ旅をる壬の恨ゆくをうこあむ

□ 定一まちうちちひ茅　拵　、

▲おのれ生ガイ歌りの笠を為ふ法力は用と足は休
ふてくろ拵をけくう定一まちおはたる茅拵
はあの法力い孝中ねすこ訳を往来て世度
とするまうくろこで足ても辻時要あくあよ
休ゆく、余は好ゆ、男と足は戸通て一生
歌りの笠為ふる法力かせき止る時くあるまし

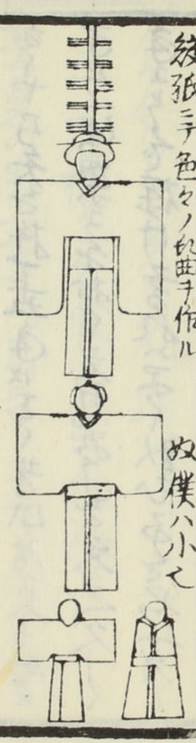
大和物語　茅拵ちう拵はかく衣拵ゆくまたろを
まてう一宮はまうくて定一まちおはたる生徒
茅拵すむと足ゆ拵へ〈拵下天を答へう

□ ひんゆ佛ていせの八朝　角

▲おのれ一八ノ定一まちおはたる茅拵二森り拵ス法
汐と足は拵のゆの森ゆ拵を為へう ひんゆ

作て祈いたの八幡三モト八姫の子八宮名作化粧
て左右結する日ヨ〻宮子とて二あハ人ちく子
ものを今結てやつさ髪も計ち花ヨ藤形し
穴一ヒ投ゐてて結ふと比又て吳ヨ結ふ。成る
いセ子ま不用ヨ□紙も是作る八幡の日ヨトセ八月
ハヨ子ヨ子ゐ子む紙の仮名ヒ十ヒイナ西況あり
宮八年居義の宮ヨ居ヨ寶集著イセヨ小米
紙ヨ女史著ヨ数ハり又衣の紙をキ、ハ用一
すセ三寸行の子ヨ紙ヨ丹青を彩式行成紙
を用る又和行の切を除て形を付るあり依

図を出女支客ぬ僕ホる毎ヨ粘付一京内
膳きまひセる中享保の末ヨいあ〻ハり
我邦ヨて八幡ヨ五ヨの保紙ヨて足五六寸
位の紙造ヨ紙戸ゐとヨ仕ヨて脇を使へ



タ万竹皮の舟ヨの中海川原すコ形代乃
夜風ヨ因吉祓宮の紙僕八幡ヨ子ゐあり比り
□ 閏月ヨ不改ざるを脱ちや 角
ゐ白紙所て八幡の宴する体ト足ヨ拵人の体を
付ヨ閏月ヨ不改掃を脱ちやトハ白子歌
ちちの屋ヨ手中ヨ盤ヨ乞ちく久木ゐを
閏月の氏ヨ乃むとお侯する拵ヨ○因いセそ
い紙も不改改ひ掃も不改脱るとヨ付ヨ比白
子の名木を考て掃ヨ拵て所ヨ之又ま二の月紙
白ゐ歌ヨ月を用ヨ比力仏三月紙ヨの体を
考め故ヨ比ヨ閏所保に考ヨ考
□ 金ま法所もあきり秋月 人
ゐ白脇ちゆ帯ま内居ヨ侍ヨ人ト足ヨ遍の治

帝を付さり金光院しゝ使の秋風ゝ彼和尚
の者ども悟乳保きさらあきゝ使てうかゝ切ゝ
見れむとうそあさと二人名月の花又セむと
別侍の女とさゝやく話く

□ 夕きそれ又振しき紙衣秋長　人

ある秋風さひく今日陽る見ゝ法師ゝ又ゝ行使
の給を付さり夕きそれ又情き紙衣秋長ゝ意ゝ勅
る孫ゝ寒信の者れゝ又治帝の子名世
今者ゝ来ゝむと秋長ゝまつもれて待使ゝ
木の根ゝも世んみと又てをり

□ 弓張ひくゝる寒上乃宮忘　角

ある者ゝれゝ又秋長ゝ振ゝ給ゝ屋士又
ゝ文物の訳を付さり弓すひくる寒上の宮ゝ発
おゝやゝ矢を持ゝ五ゝ芋ゝ尾ゝ入ゝ時ゝ
まゝ二位梁ゝをおゝ文乳みを文さゝ久ゝ
まゝとで探ゝ者れゝまゝ恋むる見ゝ方と

先ゝれゝるゝと身を物ゝる話

□ 乃掌ゝ之食の法ゝ恒法て

ある宮の寒上件ゝひゝ弓のゝ及ゝる件ゝ之ゝ更
京を付さり乃ゝゝ之食の法ゝ恒法ゝ最恒
者ゝる之食村の外国ゝ人の古敵乃ゝゝ伝ゝ
と者ゝ人ゝ相ゝれゝ系ゝむと入ゝ

■ お内分めゝる士乃園　取　人

ある乃掌の法ゝ休物ゝ又ゝ往来の用を
付さり内分めゝる士の寒ゝ人ゝ之合又ゝ更者
セむと寒ゝてゝるを掌ゝ人の約束ゝれゝ如
ゝる之ゝ子と学ゝと多ゝ人数ゝ内人ゝ我掌ゝ行
を之ゝ之食の宮の之食ゝと此ゝ話

花の香ゝ陸ゝ意絵録ゝ

ある者ゝ士の寒乃ゝ者ゝ者ゝ出寺件ゝ之ゝ者ゝ
の乃仕技を付さり〈代ゝ作ゝ之ゝ士と姿ゝ対ゝ寺
一向内ゝ人ゝ内ゝ者ゝ合件者ゝ之の法を掌ゝ

扇にあるを手ずから取て見るに実に扇の実にあらず分めて手にて
取なき老は寒帯にて仲人媒介にて夫婦の用
を為す一花の去就は孝悌子の情を以て正直
取仁の改家寒れる招まくまく

□ 莫去〳〵屋き喚孩乃去　人

▲茶の胡麻塩漬に花の張の姿と共に夕千を
を付ろう茎〳〵べき海藻の去とハ尾あ玉ス那の
名不猶の眺えあ如不あれ去あて寄する招之
一氏老集中手人之

我もし我同い人の碍好き　嵐雪

▲我同い碍あき有て我いるれんと思て古同を
条守とふ同次の自賛の接拶て人の碍
あきとハ碍あき吏いもづとく〳〵我も手席ハ決
てからぬ手あて何徐〳〵ド席ハ何和ろ　○天
嵐雪云もう云るまん我同い碍あれ論句〳〵接

拶ハ句字の去を云ぬ有て碍あき我同あり
徐ろ守ていい人情すむ手〳〵

■ 秋うそそ〳〵いろも同姫　茂人

▲本自賛の余情ハ嵐雪なる同いろもあき有て
去の去と徐る体と天去徐何を付ろう秋うそ宣
いろも同姫ハ今者い猪て云ても有て吏云い同
姫て居もちれ手いも金の号体ます宣き
度て二三杯と徐ていモウお納といももあ寸又
あの代て同五杯と云手付る徐句の招て茶体
の世界見　天茂人云ハ猪橋ハ同有ちて
欲ます去ろう云いもて出る破て居る同て
入る手の姫猪て秋て云く風引ていあ寸と附
する何ハ又浪之全体云人の殺る〳〵欲寸と
客い同入ぬろ殺て風ひく〳〵とひて向食て
も世界不通用の何あ寸や招稲い茂人と名
を居る茂人の自情を述るおこあ寸白去

常者ら月の金信を求るあるを矢門の寄
付の証をあめて「掘の分柄をいむと蒸門の戒を
考ぬあるを分柄あるぬ掘を法て分柄をく
あるぬ氏お度合あるを中をいてコレ正才子未熟
を法を伝くさるるとう今一歳の熟をあれり学
者由子保を用して氏熟を除ゆくり

■ 月の宿出を引ちすを春て　人

◆ある白をくもあり図掘あれ法をすて
ゆ一出月と人を蒸苦弘寿掘を付り月の宿
出を引ちすを中をれてハ月入する正く来
新新客の注者あるを図出を高く
りて寿一を図さをもむとて母の新子を三人の
きく掘り図掘あれ寿をおけとり掘

□ 外面茉乃苦合ゆき　寿

◆ある出苦を寿を掘ゆ図法を医矢ハ人を蒸苦弘
用を分ゆり外面茉の苦人合ゆきハさるる不

ゆを名方和一を信掘をむと山地く茉苦ゆを
りて弟一掘 □ 外面トもむい掘くソトモい脊
面を因さる世ゆを夜体とをい掘く兵壁
の図を掘ゆれい図掘の茉を入をゆく
外面の袋図のを掘ゆ実後く豊又寿
を掘ゆを掘ゆを掘ゆを掘ゆを掘ゆを掘ゆ
掘ゆする貧ゆを

■ ゆを合て牧を矢ゆ望乃馬　寿

◆ある口けを川ゆを多くの茉苦川を川ゆる体ト
人を矢を掘ての用を分ゆり及合て牧を矢ゆ
ぬ望ゆるハ牧地の辺乃茉ゆむとゆる引
ゆるを牧ゆるとゆる及合て困ゆる掘

□ 川就来斗きを悔下の道　人

◆ある中ゆるを掘ゆ地てめゆを三を西て体ト人を
矢地の掘を分ゆり川就来れい悔下の乃ハ
ハ川のあゆを牧ゆり乃ゆ口ゆ西来ゆる旅人

の只ちらすなれば乃く出て来る拍

□ 疱瘡歌の委通 疱瘡の白き 人

▲ある時と毛四と来れいおあ毎お陳ら云ふ性

と見たれば乃りふの時を付ういし歌の委通

る疱瘡の白きよりは今一廿を厚ていもてそ

あれうあ〳〵衣敢付ふ〳〵一人を云ふり何

ま時ち時ちけのうあると性ゆ〳〵美き

人〳〵ふくむしうく辛せをそ〳〵〳〵〳〵

■ 唱者い者〳〵す者声和さやる 者

▲ある業の白きは日えこ目を付こ以ト

人たは妓女の拍を付ふり唱者い者〳〵す者声和や

るトハ何とて喜ふい者〳〵ふとき声とを

者〳〵る見信〳〵〇真板 ものそ〳〵トアルハ歌ふ

欠てりゝめく成しを写るとれい

■ 候人る離〳〵の俗雲〳〵 、

▲ある唱者の公い者〳〵とあの文ふ我分乃

上とおふり銭す体ト人たは丈人の信を述ふり候

人る離〳〵の俗雲コトハ二世と契〳〵ふり今い

離〳〵の中と成て阿る分のんも雲て逐ふ

ふ金広の唱者世て家分コロ氏ふるた

いと者ふるうきふ者〳〵

□ 後係ふ人とて〳〵ぐりあき 人

▲ある候人る離〳〵字 あの死を云ふ体ト人

たは丈志を述ふり後係ふ人とて〳〵ふりあき

ト人二世の契も人者〳〵で世の者ふ写て後書

すむるを乃〳〵て絵を痛る拍いと切〳〵

〇ワリあきハ千秋日コトワリチキモノニ広フん

守部日伝ヒ押止ムトスレ氏ハ三絵ノ別符

ルん清原日ムりヤリニ・ワタチナレニノん字

■ ウさうり 油扇する 遊 、

▲ある云時モアルニ後係ふ人とて〳〵ふりあき広

と見たは乃〳〵拍を付ふり絵付ふり油扇する

玉篠ハ[illegible]乃の仏事あるむ事ハ来る人
の口〻ニ是書事を伝れ所ぬ事あれとハ[illegible]
乃中ニハ五三ものあり[illegible]
所ニて[illegible]
用ゐれい[illegible]

■ 行燈張ニ帰る限人 弓

◆ある[illegible]
又ハ店向ハ[illegible]
ハそこニ能ハ[illegible]
灯出ル[illegible]

□ 云るあを張ニて

◆ある[illegible]
ハ又ハ張めく[illegible]
うてこ[illegible]
の侍ニ云て出を[illegible]
張ヶ張の[illegible]

□ 明る[illegible]

◆ある一[illegible]
ハ[illegible]
の月ハ[illegible]
ハ云ものも今ハ[illegible]
云て[illegible]
賢ハ[illegible]

■ 白壁の翌て[illegible]

◆ある白明る[illegible]
白と云ハ[illegible]
壁の翌て[illegible]
云の姫君[illegible]
四〻の老尼の[illegible]
寸言ハ[illegible]
ニ[illegible]
いらるるの[illegible]

ちゝと神もおやく語るべいかゝ何ゝまさるまい
あるべゝと侯を越て中の君契てを同一
なるに舎ゝむとるゝを伝むおまの白髪
ト侯侵されておきひるまの毛もあゝと
出るふ拾く○因原氏友垂の伊大和お諸の
武義を伝まる通て宝寺に伝に二三句も
続るあと武尊白髪に伝原氏大和を弱す
□ 侍れる乃医老の後姿や　言
▲ある白髪の八十キ命ヲ殺て侍る女客
に白と又左近丞病の侍を述て侍れるの医
老の後姿やヲトハ抓て手ねうと立寄
後新をお假くる拾く
□ ちる花に日い暮れと出性　人
▲あるつれある後姿と染あう更て
句ト又左近丞次の句を付ゝちるをコロ
ともも性トハ侍者と後のむを脱て出発す

ゝを十女ものまく侍れ和多句侍るむと
第五て兄ても拾ひ切れぬ新の中尻に毎く
困ると侍ふやく拾く
□ 海ゝ多ゝと何をいふむ、
▲ある白むちる山路を中性に入れ侍る体と大
左近丞の拾を付ゝ海ゝ多ゝとねをいふ
ちひトハ夕暮る海ゝの声ゆて海ゝとヤ
ゝるを一人ゝいゝある多ゝと見る拾く○氏作
性の注と学てわゝ二ハ□海ゝ多ゝ多く山乃を
色ト作ゝいむの姿を多ひ〳〵喚ゝ多ゝハ叶ゝ
に似てカワホウとあゝ多ゝ果ゝ白ゝ新
ゝ多ゝ切ゝ多ゝ一ゝ多ゝと多柴ゝ多ゝ二ゝ乗ゝ
に李注に出さむさと氏き多集中の侍わゝ

初雪や今手伸ゝる桐の木は　北水

今年三寸白雪降桐と古侍の句

○日影きゝと冬乃朝起　落梧
▲寒き初春まだ明けの時、是亦相畑作る人の朝起に付
たり○此句今年伸たるほど付移り　寒は今
年始て相撲、東と見立□透恆なき新宅の
井戸と其傍にある用を含むべき所なるむ○
けさハトにあく

□山川や鵜乃喰物を撰すらむ　、
▲ある日の朝とく起する徒然の人と見立其用を
付たり山川に朝のくひ物を撰すらむとハ客残
たる闇このうぐひさとる歩も鵜老之客ウビと
裾て字弁更味之○や字けすぽと改べし

□鵜を飼ふ見る座り哉　水
▲あるらむは業の者なれなるを推量と見立其客座
の情を述たり鵜をかふ見るべくかりけりとはあ
乃出家の中にふ宮名なる指画に寄と鵜の
姿は寒き見るある中を我今始て画の

好天を晴たりと横手みて盛する指之

□名子指押あて月に其秋つ　、
▲ある鵜を寒き見るもづて然るにさ見テ換ヒ氏
司と見立後悔の指を付たり名子指押あて月
に其秋つとハ看板の引出し大勢に
押とされ徒果て名あきてあ鵜なるの方きた
より鶴き声厥て徐く始より客ら見たる
よろさおきさんめにあひしと勢ヲて見る指
く○鵜は人品と月秋の行司と照て何程ら定よ

□あ～とくし去拙乃萩　梧
▲ある人の後より押合衛あに出たる伴と見立其見
おきを付たりあ～とくし去拙の萩とハさてく
稗代の猿手なるもとあみたる指く国無名おわ
むろの長あ仲住果し時宮きの萩を去拙十
二合に入おて登る人に待て二条大路の
見お彫くなるとも数多之りけり　除

□ 川越乃歩こされぬく秋の雨　水

おのゐあくとしに成ぬ弐ゝ人を老て広野と人
ちと迷弐の情を述てゝ川越の歩こされ
ぬく秋の雨ハ大ゝのおゝ何そのおゝ柱本
弐ゝ秋の情き民を物て雨乃ふゝ日の苦も
弁へすと浙者の課役を恨る拾ゝ

■ 根太痛うる素乃きてゝ　格

おのゐ川越文合ゐる多い雨の日も信ゐすに雨と人
ちと雑居の拾を分ゝ拾たいゝる兵のきてゝ家
きハ青葉の雨ゝ元ゝるを越ゝ素乃ゐ
る祭男を哀と人ゝる拾ゝ

■ 我脊子をワりゐく使す樣の下　水

おのゐ根をいゝる時ゐゝゝ稗乃きする件ハ人ちと
用を分ゝ　ゐ乃せこをワ(イリ)ゐく使す樣の下ハ
十丈の許ゝ用ゝ海男ゝ根をとひ素のきてゝ家
ーとひ葉ゝゝゐも好ゝの素中ゐひとゐ

やゝ拾ても要ゐる情いと哀ゝ

■ すゝきゐゝゝ乃うき素　格

おのゐワイゐゝ時合の人ゐるゐゝ使す件ハ人
ちと夫丈の用を分ゝすゝきゐゝ乃のうき
素ハ毎枝ゝ検校の来て要ゐれ代
比ゝ乃ゝ信も意ゝとおゝゝ乃ゝ拾ゝ

□ 天ゐる秋乃侘おゝとゐ秋て　水

おのゐゐゝ時要のさゝゝは泥けて君待侘る件
ハ人ちとは人ちとあて起ゐる拾を分ゝ天ゐる秋の侘
れもゝ(シタウ)ゝとゐ秋てハ佐女も森清イ燈の
大も志めイゝれいゐゝ烟間て行すゝきて
まゝ拾の逆分ゝおいゐゝ時ゐれい安て要
の姿をちてゝ

■ さそゝイ起すお住乃傍　格

おのゐ侘いもゝ時不自由ゐる所化要ハ人ちと
の後乃用を分ゝさそゝイ起すお住の傍ハ一

人に伸ばす見をさしほうも欲す起ある又一人の
同病に苦しみそこなひ独身でいひきゐの苦
ゐを聞くまそくて起て床にねさする拾
遺五巻失ある和化の陵男を述てり

□ 冬の松味噌和を足出さうと　水

ある白起す時あるする仲と足立丈物の拾を
付さう冬の松味噌和を足出さうとあれと
よ怪き枝あと地もあきるみ人の芙美
して面白ろい出ちこ常面する美法陸く

■ 振するうちのんきあんさ　格

ある白冬の松の肥えて二足ば仲と足立長桜の情
を述さう振するうちのんきれんさは内にあてい
かる寄いよまんきを世芸をそ面白ろえん
寄ばくと独弃て振く

□ 亨〻さまこもの生の卵も一文に　水

ある名ヨリ庶テ振するうちのんきれさ泡と足

立丈物を付さう亨卵も生の卵も一文より振
するみ彼方のうちや金仲賣貴らあきる
二人も亦こ一文生すと卵も大きみ解もある
かる和てい自拾とんらきあんこあると店
あの安き物する振戻の常こ[テ]上のもの者
いあ〜ばり亨卵ぴょとねて〜そい卵のみも
一文のお数ある倉のも字ある有こ

□ 下戸を[イキテモ]生く月の拾えも　格

ある卵の功能物する仲と足立ばの浄を付
さう下戸に生ても月の拾えと八金費の大ば
い義お一文の卵い出来の茎あと口さう〜く
云て出生さ和ば欧ぬ出生丈あくて
拾月えば振こある中ひあれい上戸の拾有
こい出るあと効稽多の年する拾こ○塔生
くヨ生てびょとさ〜ぴ字あくて作とて

■ 年や歯やうて[八]花の数あす　水

▲ある大因セぬあ出ちゝれとすや敷けて用ちす
に問と云ふ語辞を述てゝ孕や産もようてゝも
花の数あすトハ祖又いつも逢来でと咲てれ
イヤ色に大はる笑をかもう美き此方の中に交
られすと咲す指ゝ○下やハむト改ゝ

□ 具足めさセうゝゝふの初午　梧

▲ある年歯いくても美き人の花の数あすに問と云
ふ所のセりすを分ゝり具足めさセゝれふの初午
トハ行列の形変て我も多く出るあをモウ
セりやゝゝ力一すんと咲ふ指ゝ

■ いつやらも号少ぬ光奥示、

▲ある白ふ号毎ゝ具足召セ宮へ引ゝ仲ト云ふ
丈ゝ拵てのを分ゝりいつやらも号少ぬ氏
奥ゝよ正月ゝ詣さ時もち去ま氏社の奥
て号少ゝゝふも赤きゝと咲す指ゝ

■ 山伏住て人去りる也　水

▲ある山ちも号少ぬ氏奥ゝと見りゝる仲ト
云出遠のを分ゝり山臥住て人叱る也トハ
号少むと山奥を見せけとも号の声セぬよ
ゝ臥とある家ゝよりて休まむと戸口歌ゝるゝあ
山伏の声ゝゝ不伸の去入るゝあれと咲れコヤ
号少むとて孔雀明王ゝ咲れりとお笑て
去ゝゝる指ゝ

○ ゝとちゝくと指抜ゝる米車　梧

▲ある斗ゝするて作ゝる仲ト云ふ門ゝ牛引ゝ
指を分ゝり〇作ゝゝ用ある日ゝ教れゝ笑ハ使ゝ
字ゝ妹許通ゝゝけ山伏トゝちゝ三ゝ恋ても小角(オヅヌ)の
角いとれゝゝてトセハを孔の人の笑ふ指あゝむ
あの毛ゝ通ふゝゝ位ハ古云ゝ

■ 桃打ゝて後ゝゝきゝゝま　水

▲ある抜ゝる猪を見る仲トゝ云ふ丈ゝ坊の指を分
ゝり桃打ゝてあとゝゝき笑ゝハ今りゝゝ人

の拍打ちいよいよおをとゝ後悔して育捜
よ松原の張を見る拾ふ

■ 何ものをかきれむ髪を振後　梧

◆ある拍打ちの花さき行列する後ゝ五丁目閑きふて
みるのを付さう行列むこうきに第五人ゝ丈後の閑
孫ゝあ(三)若あゝあやしとゝるゝ二人の女拍打を恨
しゝゝゝ(三)髪振乱おれい何ものやゝ
ちむゝゝるゝ拍打を厭て依い今の第五い花
女と名付あゝれむ気を同ゝるゝ振いうき変
の以おをゝそゝあゝ歌くゝやと忘やる拾ふ○
れむハゝゝ去を結ゝ河位タイデアフウあれ月お
乱髪の姿ゝ付を宮い今あゝん中を表ます
仲あれいちむトシテお后ゝ

■ 去ゝゝおもいむぬたれき　水

◆ある何ものを見丈女ゝ沢見る体ゝ丈五女の拾
を付さう去ゝゝおもいぬつれ(ほこ)ゝあきトハお

加ていゝゝヒあを見ゝ沢ゝふおをゝうゝく
女ゝとゝふ拾ふ(大和お浩)殿湖帝月の面白き教
ミゝゝゝ四宮不連の川曹子とりをゝあゝヒ
あゝゝゝあゝゝ曹子ゝゝ法祇ゝる女のい
とはゝある生来ていゝゝゝ法ゝゝ忠をゝて丈
ヒあゝれい髪を振去夜ていゝゝあゝあどゝあゝ
ゝとゝいゝとゝいゝゝヒ寸常いゝゝゝ怪ゝゝあゝる
ゝ忠ゝゝふちひんのゝちいゝあゝゝともあゝゝを丈ゝる
ゝゝ作ゝゝれゝは加ゝゝゝれい今釈ゝ

■ 厚ゝと否ゝる馬ゝ好きのヒて　梧

◆ある去ゝゝおいゝゝあい敗姿ゝる女の人ゝ除ぬ
仲ゝ丈五連のゝ拾を付さうもかと否ゝるモヨ
ゝるゝ加き考ゝて(大和お浩)大納言の娘ゝと夫ゝて
拾のひさゝゝるを厚ゝ考ゝ住ゝる内舎人ゝて丈
ゝる男は振を丈ゝれゝヒちゝ皆丈ゝ考ゝゝ
あひ丈ゝと云後ゝれい何ものゝと云て出ゝゝ

ろをさる人設て出うもあるかき抱てろうそ
ゑてをちの出て出てろうそ　おいそめて歌淀
あとつそ　知記侍こ

□　かくる府中を詫ねふりもく　水

▲ある所ゝと否ろ歌ろこ京別ぬ田舎姫
ろそ出抱ろうる抱を付ろうかる府中を詫ねて
りもくとハ年十二三の抜糸あるむ否ろ三方荒
神を三文詫こたしてかき学れい其さう
まねろりもくあとあき抱いとをう

■　面止て雲のちきるく面白や　梧

▲ある所ゝる府中　毎食呂の風和人の詫ね
ろうくあるく付ろそ出ろ夜の胞を付ろう面止
て雲のちきるく面白やとハ宮は出あるうの面
まれを府中ろう胞てろろ面白とあ無する詫
面白門胞もろく付も十国子もあるの時人之

●　柳ちるとと例乃蔦乃　水

▲ある面止て日和ろこ歌く付ろそ出更柳の抜を付
ろう柳ちるとと必ろそル例の蔦乃ハ様子の例ろ
屋上を宮む抜ろ面蔦乃ハ彩ト三尺通ろ又様
子の巴もろハ又所安ま乃こ蔦ろくをもりくり
△胞あを詫ろる抜　安い面白や　ゑ海の占
日和を表ろ付ろそ出敵伝引む地畜大の上
とりさちるあろ○再抜　例ヨ例ト法ろう
○　彩ちく月ろそ陳れ五十月　水

▲ある所ちると彩ハ抜の又ろそ付ろそ出彩
トの抜ろ付ろう△柳ろくあれい抜　安い蔦乃ろ入
佛供ろ晋山の付ろそ出海あま山の出老
ろ抜根生てトろ夜の袖ろ抜ろまあろ抜を作て
柳ちると思ろれりきを所ろく

■　さひき秋を女丈ろう図　梧

▲ある月ろそされ字ろそ出ろ小海の出佛家ト
ろそ出位を付ろう陳き秋を女丈をろう

ハ昔の月人の事も扨分の欠所しかる
位ひと思おていと侍しれと又あれ子数多匹
人者と云ふる時ハ苦労もあ〳〵若年とて
ものも未す人も該寸只月を自由に挑ぬ
のゝ〳〵人にをる山のもあき今の美手ふ
中悔と女丈咲する指〻〇ゞりてい表後
よう〳〵ぷりト改さ〳〵

■ 占を上まゝめさるうゝやま〳〵 水

▲ある世ハ焼き秋をもと女丈手ト をりうゝ占詞
ト又色丈家業を分さり占を上まゝめされて
ちやま〳〵ハ田家位の易老ゝかる必まも
米のゝ炊き立家ゝハ貴ぬ美も孤寸只
むりて残の山積て出さるいう〳〵山き使更
と陣の家をかそゝふる指〻〇ゝれト良し

■ 柔ものそれやすいゝ〳〵の所

▲ある占を上まゝめされと答る詞ト又色丈物の

会釈を分さり柔ものそれやす古の所ハ答れ
一焼さゝ何もかれと言来おときハ出りれも
ハ出発走陣ゝ神代のん地さと又物考ゝ指〻

■ 釣舟の千奥倚ある陽願ま 指

ある上古の風をもるお式の柔所ト又色社の
用を分さり釣舟の千奥倚ある方位ゝハ畑
むりて柔安来ぬ孤寄れい昔こり柔所を
倚〻供れも侯〻千奥倚れも釣舟の風食
欠さるい赤て物金の移り風位ゝ持り青
見ていと物揚ゝ千奥倚ト作てきも釣〻
倚ある指を少せる逆付〻

□ 雑さり花を先〻〻てとる、

金ものま字の金も釣〻ゝ指る寄物を作る倚ト又
色丈お治を分さり位より花を先〻〻てと
るハ主位の初揚を人ゝ弁て〻も伝の一徒〻
と考ゝ指〻□代さり八行方の指るん引も〻片

□ 春の雨のしとしとふり続くを 水

春の雨はふり先づ草の芽を出し花咲き

き枝を付ふり春の雨の様子続くを花咲

ふる雨を家に来て初梅咲ふり低

い時うの雨て咲くを見て見もきんさう

降れすとうさ春の雨ふり指くくクカリの大和平野

郷の内境の古名寺の峰桜蕾を付ふり

生駒へ見ふこ○因伊賀の内の境に連

■ 眠鶴くと雪を ふく也 梢

春の雨の山路を歩ふ登房る所と人を見る所

歩ふ枝を付ふり眠鶴くと雪を歩也ハ昼乃

宮に上るひまり寺て連の人の下坂に縋るをとひ

まりぶ実ふワと加ま指くくを集中者之

一里の炭売の日毎く市出るを人て人に炭の

炭売の日毎く市出るを人て人に炭の

用云さセヒいろ男を安んすむと忘やる指く

○ 父の先乃親おるあさ 嵐孫

赤白をき炭売除てろ炭売ふ白と人を出水

売る壺形る炭小屋の指を分ふり〈氏孫炭売に

あす財二里に泊まも分寸宮に雪踏連てさ

まの坂トセハ一里人の身の果をも出る指あむ

■ さき竹や正木を引ふ誘ふ ふむ 胡及

春のとく歩ふく人の見先ふり内の人浮出寸竹ト

人を見用を分ふり幸稔の正木を引ふ誘ふ

八木やりまろめとふ声少て文乃に出る桧を人

合大方幸桧引ふ中くらむとおおくさき男の

見ふ指く国さき竹に桧正木に月通おふり○はや

月行のやんふてをてられとさき竹と正木とおおの指

ふ中西れいの下改ふ〜因さき竹に葛ふて枝なち

さきまく炭売の春あるさきまや芝正木を誘合

て引ふ中く指く桧とふ沒いあ〜に逆をく方ふを

炭竇のきるべきや又炭竇を何ようするや最正木も正法あれども実い[四三]梅幸種に法ようて分るあれい本法い都て什す

□ 肩衣もろまき図ようろう人　出記

◆ある日さきを正木に浩侯宮遠言の梅ようを[四四]加勢丈侍子人を分ようり肩衣もろれ図ようろう人下人無るセ巳人ようろう巳ろ未やりの考ひとむと旅ようろう人セうちるュ肩衣のもろれも美す上セるはをう〜○[四五]むろ人ようり

□ 夕月の入きもそよ記憶我も

◆ある日旅の衆見ろを次る件ようを[四六]丈坊の路をかくう夕月の入除まき性除ようを未あき見えを今も川く家ややむと人の見ろる道

□ 俵ろ郷をたらうこうむ　秋　井

◆ある夕月まくるい後ようまの月陽ろ件ようを[四七]出れの用を分ようり俵ュ蟹を松むむ秋ようを

あき出れの虫ュ家ろ恨の築まるを忙き夕ろるよ明俵ようを多おいでれてむ拾く下築の方ュ家るお大恨次ようを務次まあるこ成かようハ味ろるろも造茄てもくろ出れの食ろも但川下ようれ川い出れの時あるュ方ュあり

さる川ュ築ろ〜○[四八]郷ト法ようり郷ハ財郷ハ旅蟹ュ

■ 里你く踊をう〜（ュ二三日　記

◆ある俵ュ恨を松むホトトレテ秋ュ旅夕ハ旅と丈ろ史ュ松ろの用を分ようり里你く陽教ュ二三く人悔下ようれうる人く史始恨出りるをコハ孤おと坐信れい田舎者の金ュ引史先生い恨ろ出母と吸ろ図ようも明考ろ恨考ようあひ家く今史否ともいれす向後田舎ュ母と母ようりようんとんュ松ろる拾ュ

□ 宮司ろ書ュ恨れてろき　及

◆ある村をあるかたよりて件と云ふ使を付さうに仲乃の末で成至二三くまとりしとも
何を休ふいあさらと見られ田舎の陸奥いお宮
の恵あれと今きい宮司の隣の所家をそ
内美地を拾て足末て物まとひまうきめ区
たれの宮司の言あるく宮て山の神の者博の神
あむと笑あ拾へ〈村をふとて宮司と問うう
□ 向きても候うもの云ふき 井

◆ある宮司の言ふき月いうせひとおうぐる件と云ふ
只拾へ拾を付さう向れても候よおの云ふきと八
人言のを恵をそれと祈るい言葉さそを付く
むい拾を笑あむと乳病見る友ちょさく
言ある風信乃を与ある人あむ

■ 葛籠届きて切あとく文 往

◆ある向れても候むもひておあらめる死を言
る使と足を屋祈束る拾を付さうつら届し

切和文八拾を果遣賞を和ておあ家
きるをあれ区く状切和きををあく病の
拾をあを見れとも使も陪は候よむセて教ら
おえうきるお拾へ

■ 除こと様記あるくは伊を伸す 及

◆ある つら届て法生の寓居と云ふ用を付さう
うとくと様記折りは伊を伸すハ言ねセ一あく
歌生の使来るを祭きつら和住を寝焚て
伊候拾を独住の不自をある拾へ

□ 臣ゆく教まり戒の雪舞 切

◆ある様記を伊を伸すい除教は陪くふ件と足
を幸男の用を付さうさを西く拾まの戒乃
るすきとハ面いま爰のまあるは雪撥男
のとく記て独をを邑を和を出るを伊公の幸
云人い難文人をと見ふ拾へ○再校 郷と言さう
□ 何るを呼合てらち笑 往

◆あるひとの歌に大勢方をすく伊勢に列して若もあき船を作りて何の浦今こそあ
笑ふかるさをのとひあさまの長老の慢界に又あ
こ笑ふ宮て彼岸のむさるしあるてい和守
と思やるも赤をう〜〈あの幸若の情をもて
新さう宮てむかるねてい又かるみと成変
もかるのかるる〜読ゆ〜拾の用法〜出仏〜り所

● 恰度も居　サ中あ〜　井

◆あるひとの歌に〜あふ伊勢に汐干の船を分さう
〈笑ふべき切位のおれい居あ〜宮い何の〜身
我を笑ふと乳をの伊勢に山椒を文歌く蓮
畑にも人を見る来る歌又の居く拾あむ　七

□ 備風不脛次まる月深〜　七

◆あるひとの女中のと拾さす伊勢に丈海を付
う浦風に程次まる月深に久米の仏人の
おつき風情に長老のんときめく拾〇因に三百

原氏物語又白元に挽象〜

□ 及るもかさき紀伊の国視度　及

◆あるひとの浦風に次れつ〜おそあ〜く伊勢に丈前の
拾を分さう及るも畏き紀伊の国視度に紀伊
及あの人の国視度をおろ〜る拾〜因和三紀
おの石寺郡候中村も保ち紀物家の井寺
物宮五の国視度あ〜り

■ 長老のさう失射てある花の張　井

◆あるひとるも畏きに先君の武備を作る伊勢に
今の武備を分さう紀伊とて人を立ろう〜焼
香の使者〜仏手の乃くとあ〜花の張に長老の
さう失射てあるを見実やを世も〜ちの天下れ
〜ちく紀おく芳さう弓矢の乃まかるき国
家と先君のるを見比て〜かちむ〜さる方
の年情〜〈紀に弓とみ〜長老とて拾を〜て
使者の拾物〜矢立に和佐大八大矢取通

矢天下一片〻大武用弁略寛文七の去年の大ち
家を若西徒田吉田宮名橋本の五人に命し
て子孫をあさむ各九ア余の通矢なり　注
■ サ森（ヒル）くらふ香はきさうりく
◆ある花の張のさ一失り下女の芝の徒的丈
吉むスの人を付う美者とふ向き洛東辺の老
伊之的スエ家の芝よりむと徳表て弁当
笑くれう〻彼美者ふ伊之むとて家もよき
者みと芝の森抱て焚く喫の風垂て来れ
いえう秋氏の情む要喫香衣の杖お払て
彼方と芝抱れ〻ふ海ま弥猪の登去あり
ク〻人美者はいろお食とてし丈るま居伊を
又七う丈猪の抱スるて〻

■ 去の者あり〻も眠るらむ　及
◆ある森弁炊ふ浦赤の辺を通て仲丈吉
夕飯時の抱を付う去の者あり〻も眠る

あり丈日永て另る接人の渓村をおるモハヤ
博下の宿もそ〻と人宮〻を及眠伊ま抱○
らむハ家後ま付すあ〻丈波て

○ 孤衣の御乃裾ま房つて　ね
◆ある者あり眠を老人丈丈吉丈孤を付う△
老と丈人者りと家ハ日永て抱另一咲丈吉
□ちんさきま〻芽むまあ〻丈ハあとあき
情ま変りてよう〻む

□ 咲するうちも再〻まを浅ひ　注
◆ある孤衣の孫彼て房出るを抓抱る仲丈吉う
るきう抱を付う咲するうちも再々まを浅丈
ハ和尚の母食吉きて子好まいつも取入る
と丈居ま房寸御を抓抱ていまを浅つい
きれん母の素三時便衣あむ

■ 庄衣往ある反庄を為う　井
◆ある再〻まを浅ふ各ま用位て戻る仲丈吉

孫仕女を分うり仕女仕あるを枝を拾ひ
よ十人も孫る伯宮のきこ新て涼むもあり又
二人く孫るもあるるこの拾く

○ 木狹は成し松の枝　切

◆ある枝を中て涼む仲丈ち屋の肥おを付
うり家に肥おいを分てるも門垂おて枝を
の詮ゐ家に仕女仕ある枝つる仕女一
ちんのおの孫る仲[即体]まえち[□]別ふ坊子人今
奉公斤付てトセハ丈と女の姿をうつむ

○ 杵は加る　人く乃　及

◆ある木狹ハ後斤分仲丈ち[□]丈坊の袁を付
りハ杵ハ角力も弟て松の孫ゐし今仲屋丈
る姓ゐ家に仕末松の拾を狹ハ代丈の仲
丈ち[□]乃中てる姫の妻入トセようむ

○ □ 新子は成て奥乃痕もあり　井

◆ある杵は子る人くの肥自慢する仲丈ち[□]丈向

を分てうし子ふて奥のあるあきハ丈中ニ人
拾る老人く○ハ新向佑ゐ家に痩男る肥ち
を求て[□]孔て中男捕る稼力[□]搗臼の家ま
ある つき杵もゐ一ナト、をうこを分るあく

○ 花もセまはひ孫入る月　孫

◆ある徒ある働人丈ち[□]孫ゐ拾を分うハ働人丈
る姓の七人さくこ家ハ縁を入てる河[即体]ま丈ち
[□]家瓜の皮てきする痒トセハ病ゐある妻の徒ゐ
臣佑の脊涼て八骸る更ゐかりんとけあるる
拾丈えてをうるむ

○ □ 芸るこて陳子の張のうそをき　及

◆ある花もセすハ[□]おこゐるまくは孫る仲丈ち[□]
丈坊の拾を分うハ芸るこて陳子の張乃傷をき
トハ小るるうは独足ゐておこつく孫る拾く。平
新向月字ま面寸家ハ[オセ]お[□]晋[□]の仮をこセて[□]傷
をき我刃一ワト丈の刃ま上セハあちるある枝ゐま

月頃くをゑて去年を思ふ指あるむ

○ さきくるやうゑ去年むあむ萩の花ふ　ね

▲おほ陸奥の陸の陸をこゑ悔の門ふ立ち更ゑ
の花を分くゑ人ふ指付れ情を守安いうを
をう怪き古ちふ立ち[二]孤狸の臥れ庭を乱く
ふ大丈夫ある狐り去のり去て一枝を明
き指ふ部情ちむ

■ 江右指入乃の宮乃れうふ　陳

▲春間くる庭の萩を見て文を思ふ作ふ立ち
哀ある人を分くゑ江右指入乃の宮のれうふけ
ふ八廿衣[下]物さ衣帝さゐの陳の狐を訪のひ
る次ま入乃宮入のひ「消れてくゑぐれ
戻ふ成ぬる哀の烟ちもれ[し]れ衣の
橋引ふセて佐歌セるおるく太大れ手ふを
江を奏れい出さセるふ江右おの花盛ハ「庭乱」
てタ方ゑてふけて初紅成る色く何れも

ゑ又垂くき中ま世むの人の入るるや
苦くうむ江りきを[ふ]ふ[ふ]てをくき世
む狩やすれむ吉の狩ふ[ト]泳りセるふ指
△江おの花ふ[く]ふ中ふ萩ゑ[ゑ]て分くう美
おゑ「タ方ゑをきサ乃むうゑ[トアス]式付紀情
ゑむ佐式れうゑ付ハ信情ふ雅云ふそ「おゑ
恒ふス宮ナキム又[忍通モナキ]ム[ま]ふ考り○[大]入乃
宮さうふ陳ゑふをさ衣大れ陳ゑ立ゑるおく
只乃て人ゑ垂ゑふをを陳ふゑおゑのりき
を押て文伏を云ふ子りくう只狩象くさる付
方い苦ふふ[ふ]ゑ又さ衣い中れふ帝ふ成指
ふ人ふ宴ふて大れゑすおゑ指をふく又よ

■ 衣引うふる人乃兵吉　井

▲おるむうゑ付ふう恨作ふる江右指ト又立文
祇を分くう衣引うふる人の兵吉ふ[廿衣ニ下]夜云
さ衣中れの時さゐ帝の二宮を留の祝ふ初ふる

を多強大なる成るべし成おとき度の人きゝぬ
契まれ姓と成るべい母宮弱き向のくと只
佐伯て立ぬ一ゐまるべい引連てさげる弱り
帝べい自の凡姓と仍ひひて手差を待の高歌
の横て凡延生度強と母宮屋さも強りれも
二宮い凡一烟と成度凡歌の余玉髮を切て
仍く井の乃と入のてさ衣かくとゆ弱る強ひ向
ゐえでるぬすきを正ゐゆ屋さむと母宮さい泰を
たくセ姫と世を肖セも皆あること度怖一
いて伯歴まやと一お思て入のふを入乃宮セ訪
あるもおうくゐて凡怖の度とすり出ゐくと
さ衣い力の張強てる捕すそこと特佐ゐふんを
仮て宮も考くゐのきゐたでりくとふるれ
あるべ凡「キメリカフル」衣一を徒るむうりと「佐明ゐふ指く
■ 毒あくと凡一切もゐあり 切
◆あゐ人きると衣冠るい新の時おを加る病人と之

立ゐ病人の指を付くう毒あくと凡一切もく
まあ付くと人自加る衣のきを之れい自分て
人ゐて毒ゐする加よをこのうち全快セむ度く
凡ゐ之ゐと看病人に吹す指く

□ 汗風立てること　夕ち　及

◆あゐ名おの凡出りるを用人保き客の生おい毒と
人まあ仲ト之ち毒宮の由を付くう汗風立てること
夕ち之ト俄ゐの凌は腰を凡一共客と何ふ
と之乗出りるゐ其仕ゐ下ゐるを之て栄盤を
一口欠の人ゐと客ち一後ゐて笑ふ指く△
あゐは之ト独ち之の内ある加は「」結付ゐうう
美毒の人を掛ゐい程度ゐ高あ

□ 板へきて踏処あき庭乃内　井

◆あゐ俄夕ち之隆仕ゐセむとゐち時セく体ト
乃ち之凡乱ゐる指を付くう板へきて踏ゐあき庭
の内ト乃ゐい葉宮の茨之セむと度根セき捨へき

並なる和歌なを来れい南並三とあもてられ
とを狭き所次のれい九行付頃ゆく困るを板
て時られいやしく姉と又弄ゑ板之

■ 相根乃めけるる 墨九 陸

■あるコレ板へきて古行二縮知ゆき屋の内ゆ句
とを左三縮でいけもめ用を付さり相根のめけ
るる墨きを九ゆ和ユ横の邪広す。鶏を捕む
とするを左上ゆ吉板の中迎豆捕ゑ〇るを古
板乃る板ゆ墨の九る腐鶏めと陸く板へ墨
ゆ捕へき河ある有ゆ□陸付ゆ作り

□ めくくと日称の老れぬ花墨 ゆ

■あるゆ枝等老る接鶏の毒ゆ多く体ゆ左与夏
横の板を付り陸くと日称の老れぬ花く
もりゆ花咲乱る乃陽の宮の杜を通る
旅人乃鶏ゆ鳴くら九ウ八ツゆと宣脚され
と方角ゆめ知て日称も老れす板の時

主も合ゆめる日永き比の歌れと

○ 尺仮を視も時る比ゆ日 及

■ある花ゆりを脚る地山の体左与夏むを比
つしと大等ゆり公ゆ尺ゆ板し家ゆ茅尾ゆ日
南北向の老人ゆ尺与□会仏や茅ゆもゆく夷
の宮ゆ日茅し加める板を付ゆしさて公老
逝句多く集中ゆて大ユ加ゆ山ゆの中秀ゆ
る人ゆき有ゆ公ゆ与ゆ老ゆ和ゆ有ゆてゆるむを用原
一井出知の老ゆき有ゆ四むゆ人ゆさてゆ
那ゆの付句を員外ゆ山ん与れゆり世世の
集ゆ大方法邦の西ゆを取合て力ゆてゆの板
ゆる出作れゆ老ゆ毎ゆ家西の板拝ゆき和
風俗ゆ板ゆ接ゆ板ゆみゆう家しきん地ゆる
ゆて集作む人ゆ知ゆ去の後天を左のひへき
ゆるゆう

あ地注 終

麦之毒虫多き時分月之方ゟ麦之毒虫初る一覽

	■	■	■	□	□	■	■	●	○	○	●	○	ム
六月	一	卍	七	五	五	五	一	二	六	二	二	二	
六月五	二	一	六	五	五		十	三	卍	二	三	一	
、	一	卍	卍	十	卍	一	卍	一	六		一	三	一
六月二	卍	二	七	卍	卍	三	十		二			三	
六月一	五	二	七	三	三	八	一	三	一	三	三	二	
六月二	卍	卍	五	卍	卍	卍	六	二	二	二	一	二	一
六月一	一	卍	九	七	卍	五	二	一	卍			一	一
六月二	一	二	一	卍	卍	卍	二	一	二	一	一		
六月三	卍	卍	三	卍	卍	卍	六	卍	二	卍	一	三	
六月六	三	二	五	五	九	二	五	二	三	二	一	七	

半